

一般国道17号熊谷バイパス道路関係

埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告

— I —

いけ がみ にし
池 上 西

1 9 8 3

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道17号線は、古くは中山道と呼ばれ、現在も東京と新潟を結ぶ主要幹線道路であります。

近年の交通量の増大から、沿線環境の悪化や恒常的な交通渋滞を招き、主要国道では大規模なバイパスの建設が進められております。今回、125号行田バイパスの建設が計画され、熊谷バイパスとの合流地点に所在する遺跡について、協議の結果、発掘調査・記録保存の措置が講ぜられることとなりました。

発掘調査事業は、昭和56年建設省関東地方建設局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものです。

本書は、その発掘調査報告書ですが、この書が完成するまでに、多大の御協力・御援助をいただきました建設省大宮国道工事事務所、熊谷市教育委員会、行田市教育委員会、地元関係者各位に深く感謝いたします。

なお、本書が文化財の記録保存としての役割だけでなく、教育、文化及び学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

昭和58年2月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

例　　言

1. 本書は埼玉県熊谷市大字上之字比留田に所有する池上西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般国道17号線バイパスに関連する事前調査であり、埼玉県教育委員会が調整し、建設省の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和56年10月1日から昭和57年3月31日に亘って実施した。整理・報告書作成作業は昭和57年度に受託し、実施した。
なお、調査の組織は2ページに示したとおりである。
3. 出土品の整理および図の作成は主に宮昌之があたったが、石器の実測・トレースは町田和則が行い、他に西井幸雄、望月精司の協力があった。
4. 発掘調査における写真は酒井清治、宮が、遺物写真は宮が撮影した。
5. 本書の執筆は主として宮が行ったが、宮以外の部分については文末に氏名を記した。
6. 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第五課職員があたり、横川好富が監修した。
7. 本書を作成するにあたり下記の方々から御教示を受けた。

亀井正道（東京国立博物館）

中島 宏（埼玉県立さきたま資料館）

藤原宏志（熊本大学）

木村豪章（東京国立博物館）

目 次

序

例 言

I	調査の概要	1
1.	発掘調査に至るまでの経過	1
2.	調査の経過	3
II	遺跡の立地と環境	4
III	遺跡の概観	7
IV	遺構と出土遺物	12
1.	住居跡	12
2.	溝	20
3.	土 坑	28
4.	グリッド出土遺物	32
V	結 語	45

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 遺跡周辺図	5
第3図 上層図	8
第4図 遺跡発掘全体図	9
第5図 Q・R・S・T・Uグリッド遺構配置拡大図	11
第6図 住居跡炉平面図・断面図	12
第7図 住居跡平面図・断面図	13
第8図 住居跡出土遺物（1）	15
第9図 住居跡出土遺物（2）	16
第10図 住居跡出土遺物（3）	17
第11図 住居跡出土遺物（4）	18
第12図 1号・2号溝平面図・断面図	21
第13図 1号溝出土遺物	23
第14図 2号溝出土遺物（1）	25
第15図 2号溝出土遺物（2）	26
第16図 3号・4号溝平面図・断面図	28
第17図 1号・2号・3号・4号土坑平面図・断面図	29
第18図 1号土坑出土遺物	30
第19図 5号土坑平面図・断面図	31
第20図 グリッド出土遺物（1）	33
第21図 グリッド出土遺物（2）	34
第22図 グリッド出土遺物（3）	36
第23図 グリッド出土遺物（4）	37
第24図 グリッド出土遺物（5）	38
第25図 グリッド出土遺物（6）	40
第26図 グリッド出土遺物（7）	41
第27図 グリッド出土遺物（8）	42
第28図 グリッド出土遺物（9）	43
第29図 グリッド出土遺物（10）	44

写 真 図 版 目 次

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 図版1 (1)住居跡全景(南東方向から) | 図版9 1号土坑出土土器 |
| (2)銅鏡出土状態 | 図版10 グリッド出土土器(1) |
| 図版2 (1)1号溝全景(北東方向から) | 図版11 グリッド出土土器(2) |
| (2)2号溝全景(北方向から) | 図版12 グリッド出土土器(3) |
| 図版3 (1)1号土坑全景(北東方向から) | 図版13 グリッド出土土器(4) |
| (2)2号・3号土坑全景(南東方向から) | 図版14 グリッド出土土器(5) |
| 図版4 (1)5号土坑遺物出土状態 | 図版15 グリッド出土土器(6) |
| (2)5号土坑全景(北東方向から) | 図版16 グリッド出土土器(7) |
| 図版5 住居跡出土土器 | 図版17 住居跡・グリッド出土石器(1) |
| 図版6 1号溝出土土器 | 図版18 住居跡・グリッド出土石器(2) |
| 図版7 2号溝出土土器(1) | 図版19 (1)グリッド出土石器 |
| 図版8 2号溝出土土器(2) | (2)グリッド出土銅鏡 |

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

一般国道17号は、東京から新潟へ至る幹線道路であるが、増大する交通量に対処するために、建設省では昭和37年以来、大宮バイパス、新大宮バイパス、吹上バイパスを建設している。その後、国道17号ではさらにいくつかのバイパス建設が計画されている。

埼玉県教育委員会では、この事業と文化財保護との調整を図るために、昭和45年度に国庫補助を得て上武国道（上尾バイパス、熊谷バイパス、深谷バイパス、上武道路）予定路線のセンターラインを中心に幅2kmにわたって分布調査を実施した。その成果は、調整の基礎資料となるものであり、検討を重ねて台帳、地図としてまとめた。

昭和46年11月25日に、建設省大宮国道工事事務所から、一般国道17号熊谷バイパス、深谷バイパス、上武道路改良工事に伴う埋蔵文化財について照会があった。教育局文化財保護室（当時）では分布調査の結果と照合し、遺跡の所在と取扱いについて教文第854号をもって回答した。

大宮国道工事事務所からは、昭和48年7月30日付け大國調第151号をもって、埋蔵文化財の調査方法・範囲・調査に要する費用負担などについての協議書が県教育長あて提出された。文化財保護課では、大宮国道工事事務所と協議を重ねたが、計画変更は不可能となつたため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになり、昭和50年2月27日付けで、その旨について回答した。

さらに、交叉する国道125号バイパス新設地内において検出された池上遺跡が17号バイパス地内にも広がる事が確認され、昭和54年11月13日付け教文第869号をもってその旨を通知した。

国道17号バイパスについては、これまで新大宮バイパス、熊谷バイパス建設に伴い県教育委員会が発掘調査を実施してきたが、増大するこれら公共事業に伴う発掘に対処するために、昭和55年度に財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が設立された。これに伴い、17号バイパスの調査も事業団が実施することになり、調査実施について、大宮国道工事事務所、文化財保護課、事業団の三者で改めて協議を進めた。その結果、熊谷バイパスにかかる遺跡のうち、池上西遺跡については、昭和56年度に調査を実施することになった。

法的手続を済ませた後、昭和56年10月から発掘調査は開始された。

文化庁からは、委保第5の2035号により文化財保護法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届に対する通知があった。

(宮崎朝雄)

発掘調査の組織

1 発 捜

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
		副 理 事 長	沼 尾 和 也
		常 務 理 事	渡 辺 譲 夫
庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	伊 藤 悅 光
			関 野 栄 一
			福 田 浩
			本 庄 朗 人
發 捜	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
		調 査 研 究 第 一 課 長	高 橋 一 夫
			酒 井 清 治
			宮 昌 之

2 整 理

主 体 者	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	理 事 長	長 井 五 郎
		副 理 事 長	岩 上 進
		常 務 理 事	渡 辺 譲 夫
庶 務 経 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	管 理 部 長	佐 野 長 二
			関 野 栄 一
			江 田 和 美
			福 田 啓 子
			福 田 浩
			本 庄 朗 人
整 理	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	調 査 研 究 部 長	横 川 好 富
		調 査 研 究 副 部 長 (兼調査研究第五課長)	小 川 良 祐
			宮 昌 之

3 協 力 者

熊谷市教育委員会、行田市教育委員会、地元区長および地元住民

2. 調査の経過

10月・11月 発掘区域の確認を行った後、重機により排土を行う。遺構確認面まで場所によっては1m以上もあり、排土に時間を要した。排土は浅間B軽石層の下面まで行った。排土が終了した部分から人力により遺構の確認を行う。M-10・11区にまたがる落ち込みを確認。

12月 浅間B軽石層を除去した後も遺構は検出されず、現在のバイパス路線沿いに幅50cmのトレンチを設け、掘り下げを行う。その結果、北地区は軽石層以下が腐植物を含む黒色土が続き、湧水のため掘り下げは不可能で、グライ化した層の存在は確認出来なかった。南地区は南端側で弥生時代須和田期の上器片が出土した。

12月下旬 50cmのトレンチでは不充分なので、10mグリッド内に2×2mのトレンチを4ヵ所設定し、さらに遺構確認に務めた。

1月上旬 北地区より開始した確認トレンチでは、遺物の出土は極めて少なく、北地区では全く遺構は検出されなかった。

1月中旬 南地区に設定した確認トレンチのうち、Q、R、S、Tラインに多くの遺物が出土したため、Qライン以東を全面掘り下げる。

1月下旬 掘り下げの結果、Rラインに南北に通る溝を1条(2号溝)、さらに溝に隣接して住居跡が1軒検出された。

2月上旬 SラインおよびTラインに溝を1条(1号溝)、S-16、T-17区に土坑を4基(1、2、3、4号土坑)検出し、調査を開始する。R-15区において、須和田期の包含層中より銅鏡が出土する。

2月中旬 M-10、11区の土坑(5号土坑)の調査を開始する。5号土坑は浅間B軽石層以後に掘り込まれていたため、軽石層下の3、4号溝が、5号土坑掘り下げ中に検出された。1、2、3、4号土坑の断面・遺物実測を行う。

2月下旬 5号土坑断面・遺物実測・拡張区遺構外出土遺物実測を行う。

3月上旬 住居跡および1・2号溝の調査を開始する。1、2、3、4、5号土坑断面および平面実測を行う。

3月中旬 土坑写真撮影、住居跡遺物実測・写真撮影、溝断面実測を行う。

3月下旬 住居跡平面実測、溝平面実測・写真撮影を行う。航空写真を撮影し、事務所及び出土遺物の整理、図面の不備等を修正する。その後調査区の埋め戻し作業を行い、31日で全ての作業を終了する。総調査面積は約5000m²である。

調査は、北東側に農業用水、電話ケーブル、南西側に国道17号バイパス、中央に地下道があり、危険を回避するため各建築物から2~5m離して行った。

II 遺跡の立地と環境

池上西遺跡は、熊谷市大字上之字比留田3651他に所在し、国鉄高崎線熊谷駅を基点とした場合、その北東方向約2.8kmの所に位置する。

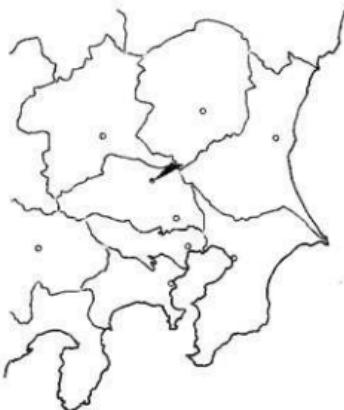
熊谷市は、埼玉県北部のほぼ中央に位置し、北は妻沼町、東は南河原村・行田市、南は吹上町・大里村・滑川村・江南村、西は川本町・深谷市と接する。市内には、国道17号およびそのバイパスをはじめ、国道125号、140号、407号が通り、国鉄、秩父鉄道、東武鉄道熊谷線（58年5月で廃止）が合流し、交通の要地として、県北の中心都市となっている。

池上西遺跡は、市内南側を流れる荒川の沖積扇状地上にあり、星川の右岸自然堤防上に位置する。このような自然堤防は市内各所で確認されているが¹³、河川の氾濫による土砂が平坦に堆積しており、地表からの観察でその存在を確認することは非常に困難であり、従来遺跡は少ないとされていた低地（主として自然堤防上）にも多くの遺跡が存在すると考えられよう。

今回調査を行った池上西遺跡は、1の池上遺跡の西端に位置する。池上遺跡は、昭和53年度、57年度にさきたま資料館が実施し¹⁴、検出した遺構を含めると、現在までに須和田期の住居跡11軒、条溝3本、土坑約30基、平安時代の堅穴状遺構4、建物跡5、井戸跡3、その他土坑、溝が多数検出され、中世遺物も出土している。

弥生時代の遺跡は、1の池上遺跡の他に、2、3、4で確認され、3の平戸遺跡では、栗林式土器に共通する要素をもつ壺形土器が発見され¹⁵、4の池守遺跡では、吉ヶ谷式、前野町式土器が出土している¹⁶。

古墳時代の遺跡は、5の東沢遺跡で自然の河川中に、五領、和泉の土器と木器が出土した。木器は、フォーク状・スコップ状・鋤・砧・叩台・槍状等があり特筆される¹⁷。また池上西遺跡でも僅かながら五領期の土器が出土している。古墳時代も中葉から後半に入ると、集落が増加し、古墳も出現する。古墳は、団幅北方にベルト状に分布する。6は肥塚古墳群で、横穴式石室を持つ例があり、多くが20m前後の円墳である¹⁸。7は中条古墳群で、武人、馬形埴輪を出土した鹿那祇東古墳（a）、帆立貝式古墳で、後円部裾円筒埴輪列の内側に2か所の墓前祭跡が検出された鎧塚古墳（b）、同じく帆立貝式の女塚1号墳（c）等数多くの古墳が存在する¹⁹。行田市坂巻の坂巻古墳群（8）では、3基の古墳が調査され、1号墳（a）は前方後円墳で、全長約50mを呈し、後円部には胴張りの横穴式石室が2基並んで検出された。埴輪



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺図

を有するが7世紀代と考えられている⁹⁾。9は南河原村大塚、行田市斎条に分布する斎条古墳群で、aのとやま古墳は全長69mを呈する。5世紀末～6世紀初頭頃の前方後円墳である⁹⁾。その他10～14でも古墳の現存あるいは埴輪の出土が確認されている。

集落遺跡は、2・3・11・15～25で確認されている。24の中島遺跡では、鬼高期の土師器窯が4期検出された事で注目されている¹⁰⁾。

奈良・平安時代の集落は、1の池上遺跡で、掘立柱建物・竪穴状遺構が検出され、縄文・灰釉陶器が出土している¹¹⁾。24・26の皿尾遺跡¹²⁾、27でもこの時代の遺構・遺物が発見されている。

中世に入ると、28の中条氏館跡¹³⁾をはじめとして、29の成田氏館跡、30の熊谷氏館跡、31の忍三郎館跡などの館跡が点在し、32の忍城主居城の忍城は良く知られている。

以上極めて簡単ではあるが、地理的・歴史的景観を追ってみた。荒川と利根川に挟まれた県北地域は、両河川の氾濫による冲積低地が広く分布し、古くから肥沃な穀倉地帯となっていた。その後度重なる河川の氾濫により土砂が堆積し、水田中に埋没した古墳や集落が今後も発見される可能性は極めて高い。

引用・参考文献

- 1) 埼玉県『土地分類基本調査 熊谷』1974
- 2) 小川良祐・金子真士「池守・池上遺跡発掘調査の概要」『資料館報』10 埼玉県立さきたま資料館、1980
中島宏「熊谷市池上遺跡発掘調査概報」『資料館報』13 埼玉県立さきたま資料館、1982
- 3) 萩原文藏「平戸遺跡」『埼玉県上器集成』4 埼玉考古学会、1976, pp.18~19
- 4) 行田市教育委員会「池守遺跡発掘調査概報」行田市文化財調査報告書第8集、1980
- 5) 熊谷市教育委員会『中条里遺跡調査報告書I』昭和52年度熊谷市埋蔵文化財調査報告、1979
- 6) 熊谷市史編纂委員会『熊谷市史』前編 1964
- 7) 前掲6)
- 熊谷市教育委員会『鎌塚古墳』昭和55年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書、1981
- 8) 埼玉県『酒巻（さかまき）古墳群』『新編埼玉県史』資料編2 1982, pp.825~829
- 9) 埼玉県教育委員会『とやま古墳』1967
- 10) 熊谷市教育委員会『中条遺跡群・中島遺跡』昭和54年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書、1980
- 11) 前掲2) の下
- 12) 塙野博「行田市星宮他皿尾遺跡の土器」『埼玉考古』4号、1969
- 13) 熊谷市教育委員会『権現山古墳・常光院東遺跡』昭和56年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書、1982
- 14) 本稿における遺跡の位置は、前掲の文献の他、埼玉県教育委員会『埼玉県遺跡図鑑』1975を使用し、若干の加途筆を行った。

なお本調査と相前後して実施された県立さきたま資料館の調査において、本調査区検出の遺構をはじめ、多数の遺構・遺物の検出があり、58年度に報告書刊行の予定であるという。

III 遺跡の概観

本遺跡は、隣接する池上遺跡と続く遺跡であるが、地番が池上ではない事から「池上西遺跡」の名称に変更した。遺跡の所在する周辺は、広く水田地帯となり、若干の微高地部分に家屋と煙が点在する。遺跡の北側約400m の所に星川が蛇行しながら東流し、遺跡はその星川右岸の自然堤防防止に立地している。現地表面は標高22m 前後ではほぼ平坦であるが、遺構面までの地層が後で述べるように厚いため、地表から遺物の採集はされなかった。

調査は、国道125号バイパスとの合流点に限られ、全長約240m、幅21m～25m を測り、総調査面積は約5000m²である。現在用地には、道路工事に先だつ土盛が約30cm 行われており、用地に平行して通る農業用水路と電話ケーブルによって遺跡の一部が破壊されている。遺跡は現在の国道17号バイパス下および今回の調査範囲外の道路用地内にまで広がることが判明した。

調査は用地中央の地下道を挟んでそれぞれ北地区・南地区と仮称した。隣接する池上遺跡では平安時代の遺構が検出されていることから、浅間B軽石層が確認される面まで重機で堆土を行った。軽石層除去後においても遺構が検出されないため、探査用に2×2 m のトレンチを擾乱部分を除き3 m 間隔で設定し、遺構・遺物の検出に務めた。その結果、北地区は遺物の出土がほとんどなく、46か所のトレンチにも遺構は検出されなかった。南地区でもM-10、11区において、平安時代の溝、時期不明の土坑が検出されただけで遺物の散布も稀であった。しかしQライン付近から弥生時代須和田期の遺物の出土が極端に増し、さらに同時期の溝が2条、住居跡1軒、土坑1基、時期不明の土坑3基が検出された。

弥生時代の住居跡は、やや胴張りの隅丸方形で、土器の他に石皿、磨石、石包丁、打製石斧、砥石等が出土している。同土坑は、小判形で土器片が多く含んでいた。同溝は、2条検出された。確認面の幅は約2.6m で、断面も漏斗状を呈し、両溝は類似する。土器片を多く含むが石器の出土はなかった。なおこの溝は県立さきたま資料館の調査区へ統く。

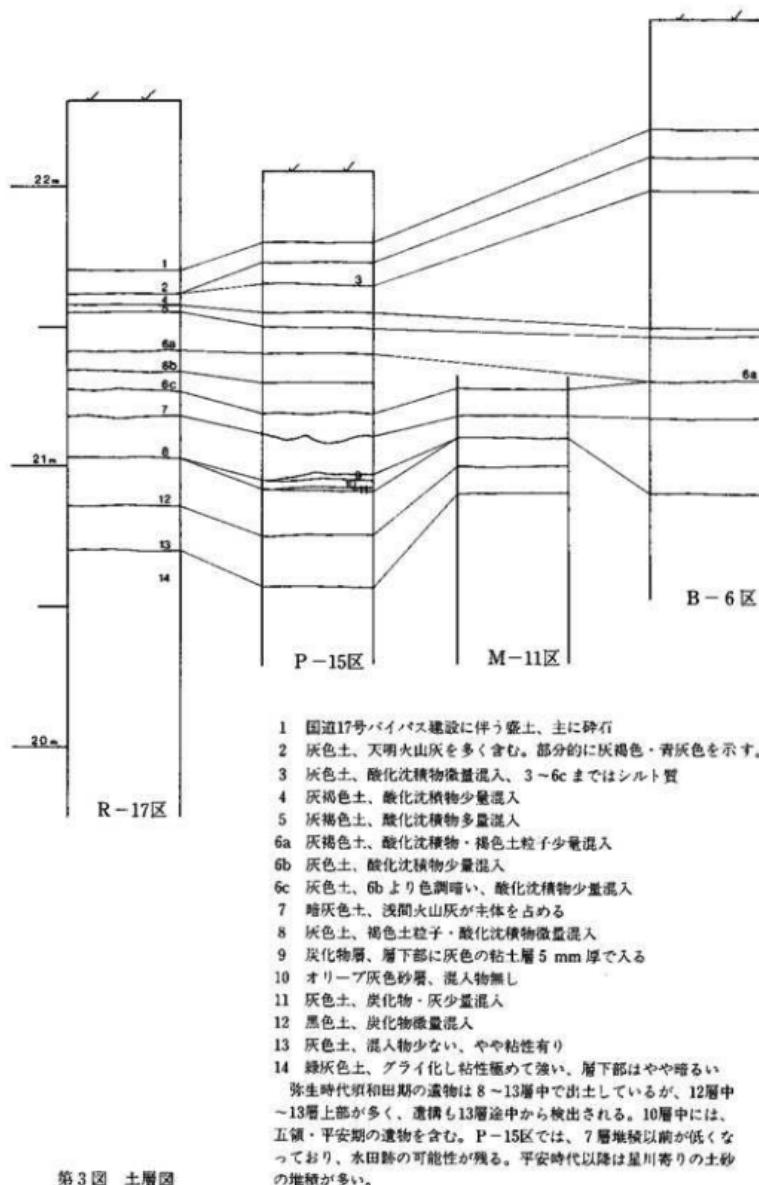
平安時代の2本の溝は、小範囲の検出であり、その性格、詳細な時期については不明である。

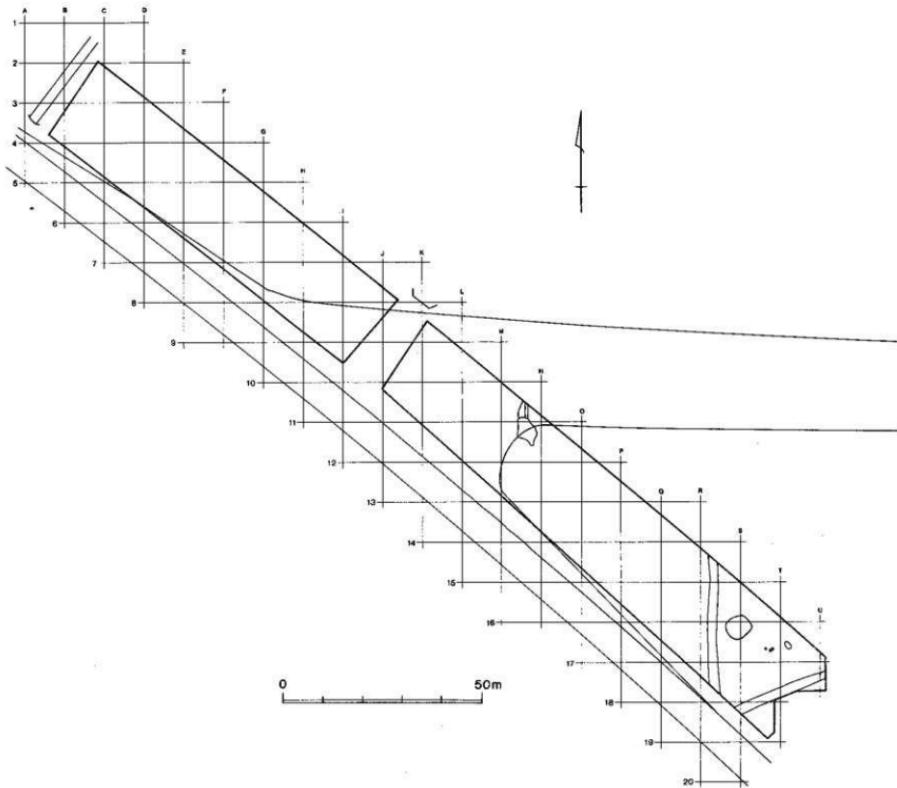
時期不明の土坑は4基あり、そのうちの3基は小規模であったが、平安時代の溝と重複する土坑は、不定形で大きく、円碟、桃の種子、獸骨片が出土し、浅間B軽石層を切り込んでいる事から平安時代末以降と断定されるが、時期決定の遺物の出土がなかった。

その他、遺構には伴わなかつたが、銅鏡、打製石斧、凹石、石包丁、五領期の甕、壺、高环の破片が出土した。また調査終了後判明した事であるが、P-15区のプラント・オバールの調査で、水田跡の可能性があるという結果が出たが、残念ながら遺構として検出されなかつた。

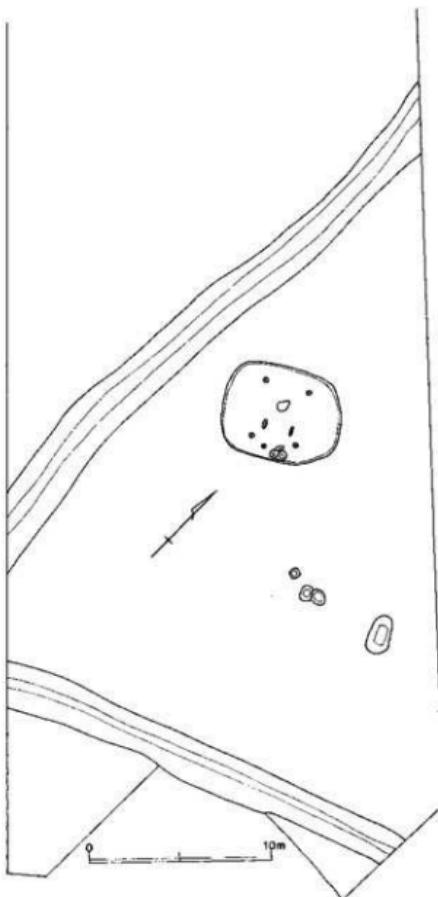
なお、調査は用地全体に座標北を基準に一辺10m のグリッドを組み、北から1→19の整数で、西からA→Uのグリッドポイントで表現することとし、「R-16区」ととした。出土遺物、検出遺構はグリッドポイントにより実測した。

遺跡の遺構配置および地層断面は別図のとおりである。





第4图 遗踪発掘全体図



第5図 Q・R・S・T・Uグリッド構造配置拡大図

IV 遺構と出土遺物

1. 住居跡 (第6図～第11図)

住居内に S-16坑があり、R-15・16区、S-15・16区にまたがる。遺構の重複、攪乱等無く、遺存状況は良好である。住居跡西側には約2m離れて1号溝が近接する。

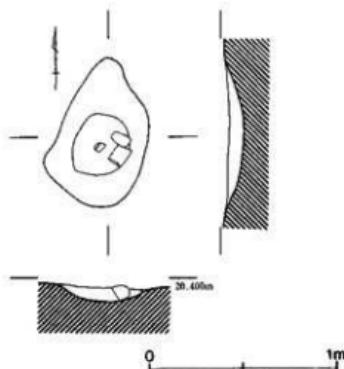
規模は、長軸6.38m・短軸5.18mで、やや脛張りで、歪んだ隅丸の長方形を呈する。炉に近い壁を通る軸方向は、N-32°-Wを示す。

床面は、グラウジ化した土壤中に構築されており、覆土と明瞭に区別できた。床面のレベルは北側が南側より高く、最大高差は17cmあり、壁溝内のレベルも同様に北側が高い。床面は踏み固めた様な場所はなく、湿気を帯びていて軟弱である。

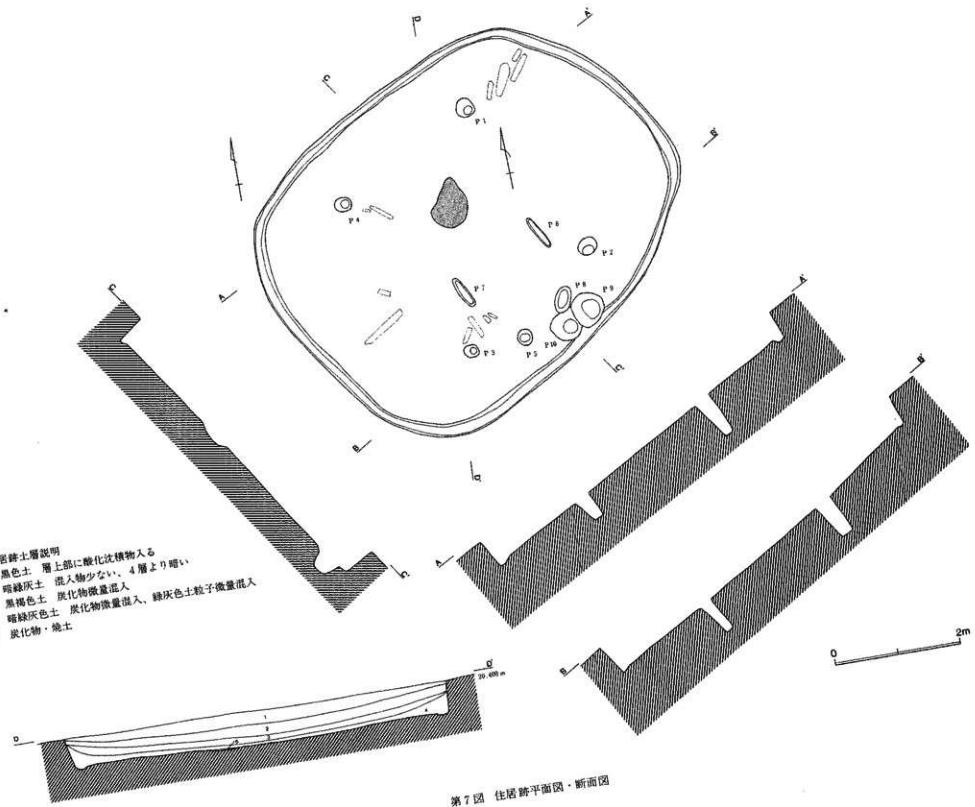
壁溝は、幅10cm～20cmで周囲するが、南東壁でP₉・P₁₀と重複する。その重複は僅かであったため、新旧関係は判別できなかった。

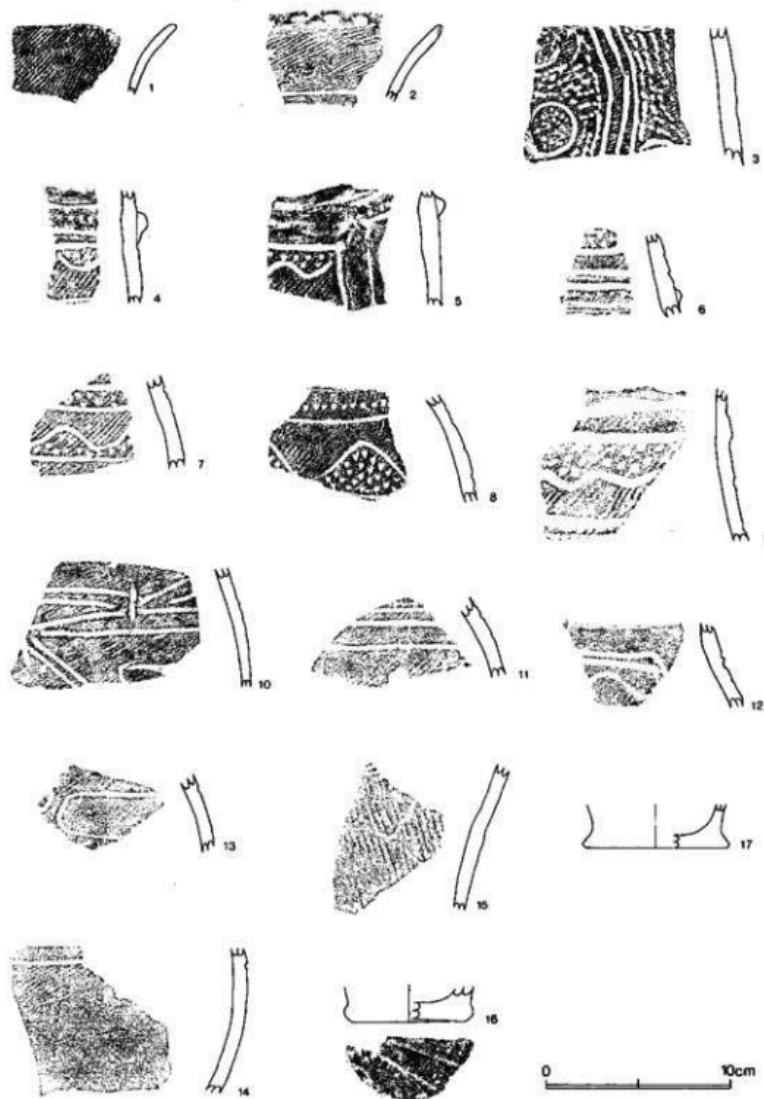
ピットは、P₁～P₉の10か所が検出された。P₁～P₄は、規模・深さ・規則的な位置関係から主柱穴と考えられる。P₁上幅30cm×27cm・下幅14cm×13cm・深さ69cm、P₂上幅32cm×27cm・下幅20cm×15cm・深さ66cm、P₃上幅25cm×21cm・下幅11cm×10cm・深さ61cm、P₄上幅27cm×22cm・下幅14cm×13cm・深さ40cmを計る。ピットの断面形は、いずれも逆台形を呈する。P₁～P₂間の距離は2.94m、同じくP₂～P₃は2.40m、P₃～P₄間は3.10m、P₄～P₁間は2.43mであり、住居の平面プラン長軸方向が北東～南西であるのに対し、柱穴

間を結ぶ方形は北東～南西方向に短い。P₅は上幅26cm×23cm・下幅16cm×13cmを計り、平面形は柱穴に似るが、深さは16cmであり、位置的にP₁～P₄とは性格を異にすると考えられる。P₆は上幅58cm×13cm・深さ10cm、P₇は上幅54cm×15cm・深さ10cmを計り、平面形は溝状、断面形はU字形を呈する。P₈・P₉はP₂・P₃・炉の間にあり、軸方向は住居短軸とほぼ同じである。P₈は上幅45cm×23cm・深さ16cmを計り、平面形は梢円形、断面形はU字形を呈し、P₁₀と僅かに接する。P₉は上幅55cm×51cm・深さ28cmを計り、平面形は卵形、断面形は逆台形を呈し、P₁₀、壁溝と僅かに重複する。P₁₀は上幅49cm×41cm・深さ25cmを計り、平面形は梢円形で、断面形

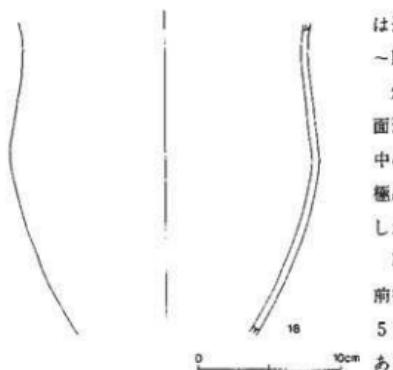


第6図 住居跡炉平面図・断面図





第8図 住居跡出土遺物（1）



第9図 住居跡出土遺物（2）

石、石鎚、礫器、敲器、石包丁、石斧等多彩であるが、多くは覆土中からの出土で、床面出土は自然石・土器小片を含めて13点だけである。

出土遺物

1、2は口縁部で、ともに0段多条LRの繩文が施されており、2の口唇部には連続押捺が、頭部側には沈線が施されている。器面状態はやや不良¹⁾。胎土には微細な白色粒子と透明粒子を僅かに含有する²⁾。色調は1が黒褐色（赤褐色）、2がにぶい黄橙色～黒褐色（にぶい黄橙色）を呈する。

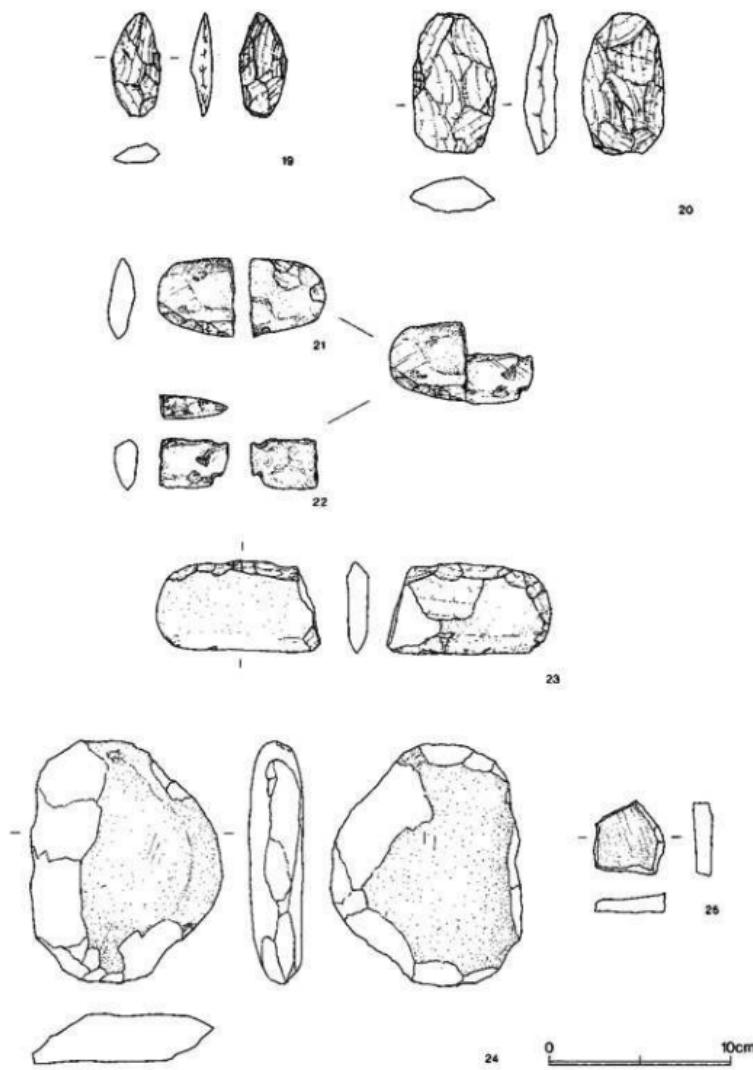
3～9は器面上に刺突文が施されている。3は0段多条のLRの繩文を地文として、沈線で凹を構成し、また縱方向にも3条施す。半月状の刺突文は連続して施されるが、縱方向の沈線内には施されていない。器面状態はやや不良であるが、内面には横方向の磨きが認められる。色調は黒褐色で、外面の一部が褐灰色を呈する。4～6は同一個体と考えられる。縱横方向に隆帯を貼付し、その後沈線を施し、隆帶上および沈線により区画された部分に半円状の刺突を施す。地文は0段多条LRの繩文である。器面状態はやや不良で、裏面はほとんど剥落している。胎土には白色・透明粒子はほとんど無く、赤色粒子、黒色柱状粒子を含有する。色調はにぶい黄橙色～灰褐色を呈する。7・8は別個体であろうが、文様構成が類似している。どちらも0段多条LRの繩文を地文とし、横方向に沈線を施す。4～6・9が波状沈線の口縁部側に刺突を施すのに対し、7・8は底部側に施す。器面状態はやや不良で裏面は剥落が多い。胎土は白色・透明・黒色柱状粒子を含有し、8には赤色粒子も含む。色調は7が灰褐色、8がにぶい黄橙色である。7は床面出土。9は地文に単節LRの繩文を施こし、沈線、波状沈線、半月状の刺突によって文様を構成しているが、施文具がやや大きく、沈線・刺突の幅が広い。器面状態はやや不良で、裏面は剥落が多い。胎土は白色・透明粒子の他に、赤色・黒色柱状粒子を含有する。色調は褐灰色を呈する。

10～14は、0段多条LRの繩文を地文とし、沈線により文様を作出している。10は沈線の集合部分に縱方向の短かい沈線を刻む。11・12は風化が多く、12は繩文が磨消されているのか不明。15は脇部下半が磨かれている。11・12・14の裏面は剥落が多い。色調は10が黒褐色（にぶい褐色）、11・12はにぶい黄橙色（灰白色）、13は灰白色～淡赤橙色（黒褐色）、14は褐灰色（灰白色）を呈する。胎土は

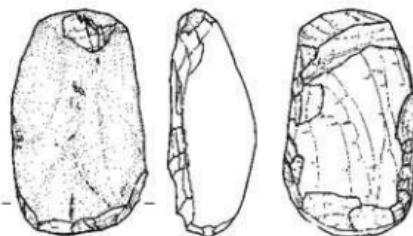
は逆台形であるが、一方が漏斗状を呈する。P₈～P₁₉は貯藏穴と考えられるが、断定はできない。

炉は、主柱穴の中心より北西側に位置する。平面形は不定形、最深部10cmの皿状を呈する。覆土中には炭化物と焼土が認められたが、焼土の量は極めて少ない。炉内には東側に、被熱により破損した石が含まれていた。

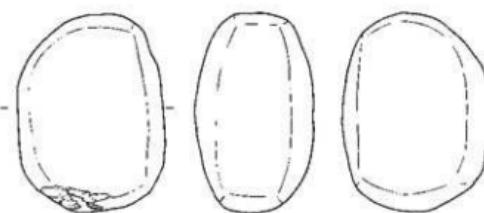
覆土中には、長さ10cm～80cm、幅5cm～15cm前後の炭化材が散在していた。いずれも床面から5cm～20cm浮いた状態であったが遺存状況はあまり良くなかった。



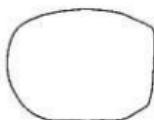
第10図 住居跡出土遺物（3）



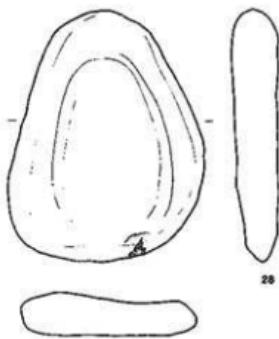
26



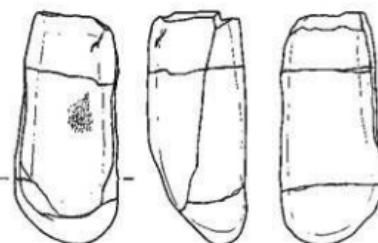
27



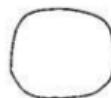
0 10cm



28



29



0 20cm

第11図 住居跡出土遺物（4）

いずれも白色・透明・赤色・黒柱柱状粒子を含有する。11~13は床面出土。

15は荒磨きが顕著である。器面状態は良好で、胎土には砂粒を含み、雲母を多く含有する。色調は黒褐色(褐灰色)を呈する。

16・17は底部で、16は木葉痕を残すが、17は風化が激しく不明である。どちらも石英粒子・雲母粒子を含有する。色調は16が灰褐色、17が橙色を呈する。

18. 麋形土器 脊部破片を復元実測したものである。脊部最大径は21.7cmである。文様は無く、縱方向に窓削りが施されるが不鮮明である。脊部には煤が多量に付着しているが、下半には全く無い。胎土は石英粒子・雲母粒子を含有する。色調は黒褐色~褐灰色を呈する。

19. 石鎌 最大長5.7cm・最大幅2.7cm・最大厚1.2cm・重量17g、左右から大きく剝離されていると思われるが、風化が激しい。床面出土。ホルンフェルス。

20. 打製石斧 最大長7.7cm・最大幅4.7cm・最大厚1.8cm・重量72g、短冊形で脊部は僅かに張り出す。風化が激しい。ホルンフェルス。

21. 石包丁として製作途中で破損したのであろうか、22と接合するが、表面および裏面刃部が研磨されている。最大長4.1cm・最大幅4.2cm・最大厚1.3cm・重量29g、P₄出土。砂岩。

22. 21と接合するが、背面側半分が無く、背面および刃部の表裏面が研磨されている。また右端には上下を抉込むように「つまみ」を作り出している。最大長3.2cm・最大幅2.8cm・最大厚1.2cm・重量16g。砂岩。

23. 石包丁 最大長9.1cm・最大幅5.0cm・最大厚1.2cm・重量73g、右端部が欠損し、刃部は長軸方向に研磨され、ほぼ直線的である。背面には煤が付着する。砂岩。

24. 砧器 最大長13.1cm・最大幅10.5cm・最大厚2.8cm・重量478g、表面中央寄りが研磨され、刃部はほぼ全周にわたっている。床面出土。砂岩。

25. 砥石 最大厚1.1cm・重量25g、表面が研磨されている。石皿の破片の可能性もある。砂岩。

26. 敲石 最大長12.1cm・最大幅7.1cm・最大厚4.6cm・重量508g、曲面に自然面を残す。下端部に打痕と研磨面がみられる。床面出土。ホルンフェルス。

27. 磨石 最大長10.6cm・最大幅6.3cm・最大厚8.1cm・重量780g、側面に面取りしたように、使用による顕著な磨痕を残す。表面に円形に煤が付着している。床面出土。安山岩。

28. 石皿 最大長22.7cm・最大幅17.5cm・最大厚4.0cm・重量2342g、縁は無く扁平である。使用面は片面のみで、磨面のへこみは少ない。砂岩。

29. 爐石 最大長20.7cm・最大幅9.5cm・最大厚8.4cm・重量2678g、被熱により破損しており、上端部が欠損している。側面および裏面に研磨された部分がある。炉内出土。ホルンフェルス。

註 1) 器面状態については、文様、整形が明瞭で風化のほとんどない場合を「良」とし、風化や剥落があり、文様、整形等一部不明瞭な場合を「やや不良」とした。

2) 胎土中の含有物質は、多くの土器に白色粒子と透明粒子が含まれており、特に記述のない場合はいずれも含有している事を示す。また含有物質の量はいずれも微量である。

3) 色調は、日本色研事業社発刊の「新版標準土色帖」を利用したが、土器の色調は部分により大きく異なり厳密とはいいがたい。() 内は裏面の色調である。

2. 溝

1号溝(第12図・第13図)

R-18区、S-17区、T-17区、U-17区で確認された。若干東へカーブしているが、軸方向はおおむねN-68°-Eである。確認された長さは24mである。

溝の断面形は漏斗状を呈し、確認面における最大上幅2.60m、下幅36cm~64cm、最大深さ1.13mを計り、底面のレベルはTライン付近がやや低いがほぼ水平である。

底面および直立部分の壁面には真蘿の生息や砂の堆積が確認され、溝に水が溜った事を示している。

本溝は県立さきたま資料館による調査区内においても検出されており、3号溝として記録されている。

出土遺物

1~4は口縁部で、器面に縄文を施こし、1~3は口縁部へも施す。3は単節LR、他には0段多条LRの縄文である。器面状態はやや不良であるが、1~3の内面には横方向の撫でが僅かに認められる。胎土は3に赤色粒子、4に黒色柱状粒子を含む他は一般的。色調は1がにぶい赤褐色(褐灰色)、2が灰褐色~黒色、3が灰白色~褐灰色、4がにぶい黄褐色(褐灰色)を呈する。

5~9は単節LRの縄文に沈線を施す口縁部。8、9は同一個体であろうが、両者に接合する面はない。7は口縁部にも縄文を施し、8・9は口唇部を外側から連続的に押捺する。器面状態はやや不良であるが、7は口縁部内面に横方向の撫でが認められる。胎土は一般的な混入物の他、5・6・8・9には赤色粒子、黒色柱状粒子を含有し、7は雲母粒子を多く含有する。色調は5がにぶい黄褐色(褐灰色)、6がにぶい黄褐色、7がにぶい橙色~褐灰色、8・9がにぶい赤褐色(褐灰色)で表面に煤が付着する。

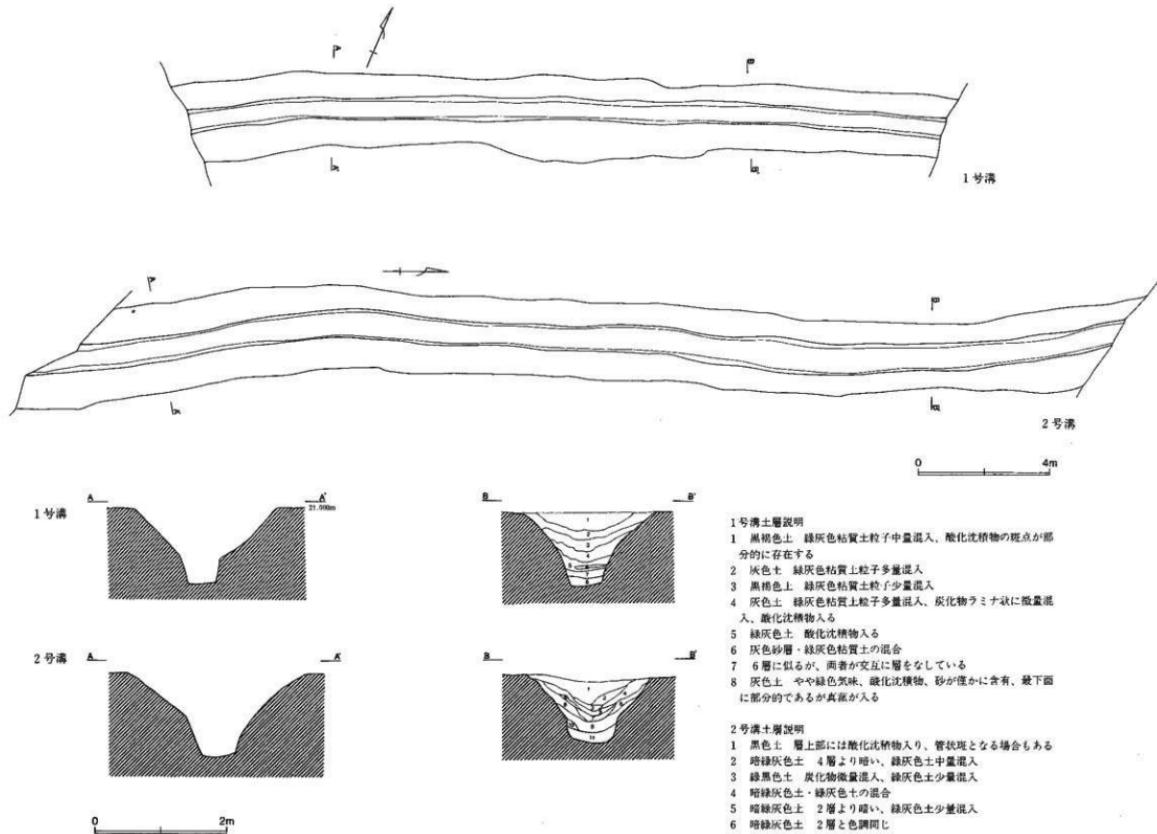
10は山形に左→右方向に不連続な沈線を施している口縁部で、口縁部は部分的に内側へ僅かに巻き込む。器面状態は良好で、内面には横方向の撫でが認められる。胎土は石英粒子と雲母粒子を僅かに含有する。色調は褐灰色~黒色を呈する。

11は三角形の区画を重ね半月状の刺突を充填している。器面状態はやや不良であるが、内面には範撫での痕跡が僅かに残る。胎土は透明粒子、白色粒子少なく、黒色柱状粒子、赤色粒子を僅かに含有する。色調はにぶい黄褐色(褐灰色)を呈する。

12は0段多条LRの縄文を施し、2と同一個体と思われるが部位が判然としない。器面状態は良好で、内面には横方向の範撫での痕跡が残る。胎土・色調は2に同じ。

13は単節LRの縄文を地文とし、横・斜方向に複数の沈線を施す。横方向の沈線の下2本上に、直交する短かい沈線を付ける。器面状態はやや不良であるが、裏面には横方向の範削り痕が認められる。胎土は微細な透明粒子・白色粒子の他に赤色粒子・黒色柱状粒子を僅かに含有する。色調は褐灰色(黄灰色)を呈する。

14は0段多条LRの縄文を地文とし、沈線による文様を施す。残存状態はやや不良であるが、裏面



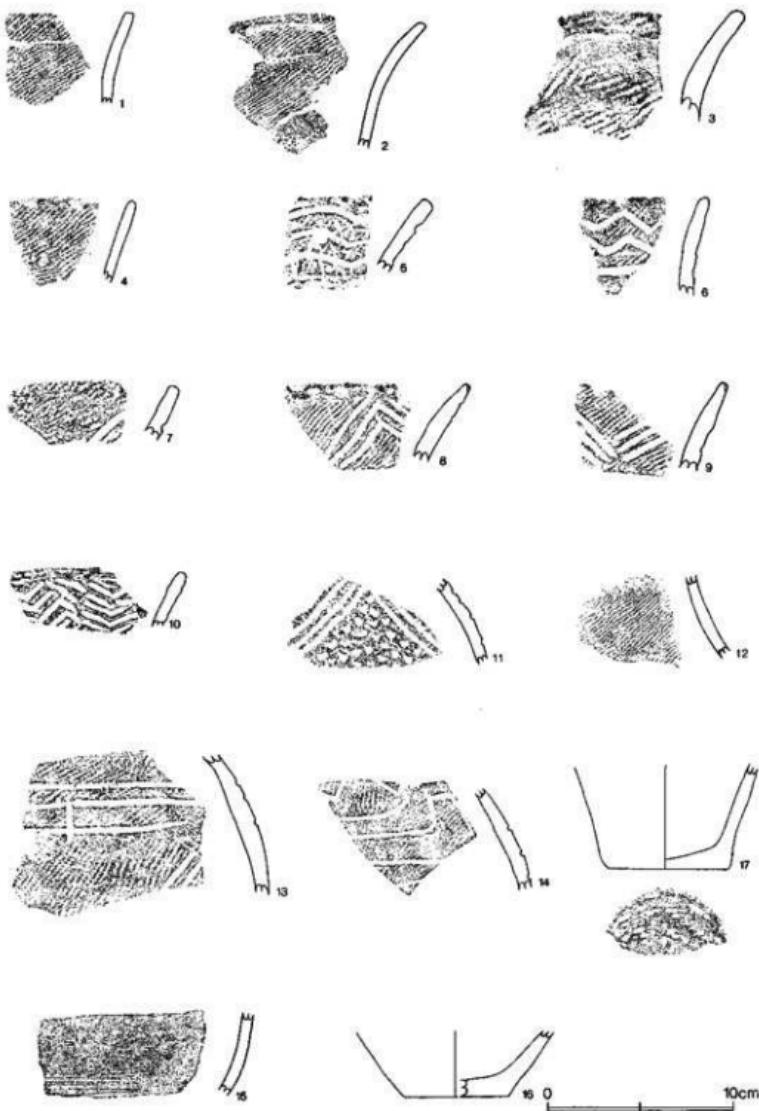
1号溝土層説明

- 1 黒褐色土 緑灰色粘質土粒子中量混入、酸化沈積物の斑点が部分的に存在する
- 2 灰色土 緑灰色粘質土粒子多量混入
- 3 黒褐色土 緑灰色粘質土粒子少量混入
- 4 灰色土 緑灰色粘質土粒子多量混入、炭化物ミナ状に微量混入、酸化沈積物混入
- 5 緑灰色土 酸化沈積物混入
- 6 灰色砂層 緑灰色粘質土の混合
- 7 6層に似るが、両者が互反に層をなしている
- 8 灰色土 やや緑色気味、酸化沈積物、砂が僅かに含有、最下面に鉛物であるが真庭が入る

2号溝土層説明

- 1 黒色土 層上部には酸化沈積物入り、管状坑となる場合もある
- 2 暗緑灰色土 4層より暗い、緑灰色土中量混入
- 3 緑黒色土 炭化物微量混入、緑灰色土少量混入
- 4 暗緑灰色土 緑灰色土の混合
- 5 暗緑灰色土 2層より暗い、緑灰色土少量混入
- 6 暗緑灰色土 2層と色調同じ
- 7 黒褐色土 緑灰色土微量混入
- 8 黒褐色土 緑灰色土少量混入
- 9 黒褐色土・緑灰色土の混合、下層は粒子粗く、下面に炭化物層に入る
- 10 緑色灰土 黒褐色土微量混入、下面に炭化物層に入る
- 11 黑褐色土・緑灰色土の混合

第12図 1号、2号溝平面図・断面図



第13图 1号沟出土遗物

には横・斜方向の範拂でが施される。胎土は白色粒子、砂粒、黒色柱状粒子を含有する。色調は黒褐色(褐灰色)を呈する。

15は横方向に条痕が施されている。残存状態は良好で、裏面には横方向の範拂でが施される。胎土は石英粒子、雲母粒子を含有する。色調は黒褐色(にぶい橙色)を呈する。

16、17は底部でともに網代痕を有する。残存状態はやや不良で、16の内面は剥落が多い。外面には文様ではなく、縱方向の範削りが認められる。胎土は16が白色粒子、透明粒子、赤色粒子の他、黒色柱状粒子を僅かに含有する。17は白色粒子、雲母粒子を僅かに含み、粗い石英粒子、砂粒を含有する。色調は16がにぶい橙色～黒褐色、17が明褐灰色(褐灰色)を呈する。

2号溝(第12図・第14図・第15図)

R-14~17区で確認された。東西に僅かに蛇行するが、ほぼ南北に通り、さきたま資料館調査区においても、本溝の延長上が検出されている。当調査区において確認された長さは35.6mである。

溝の断面形は1号溝と同じく漏斗状を呈し、確認面における最大上幅2.70m、下幅42cm~80cm、最大深さ1.30mを計り、1号溝より僅かに規模が大きい。底面のレベルは南側で低くなり、その比高差は約25cmである。

溝底には若干の真菰が残存しており、覆土中部分的に炭化物の層が存在した。

本溝はさきたま資料館による調査区内では、2号溝として記録されている。

出土遺物

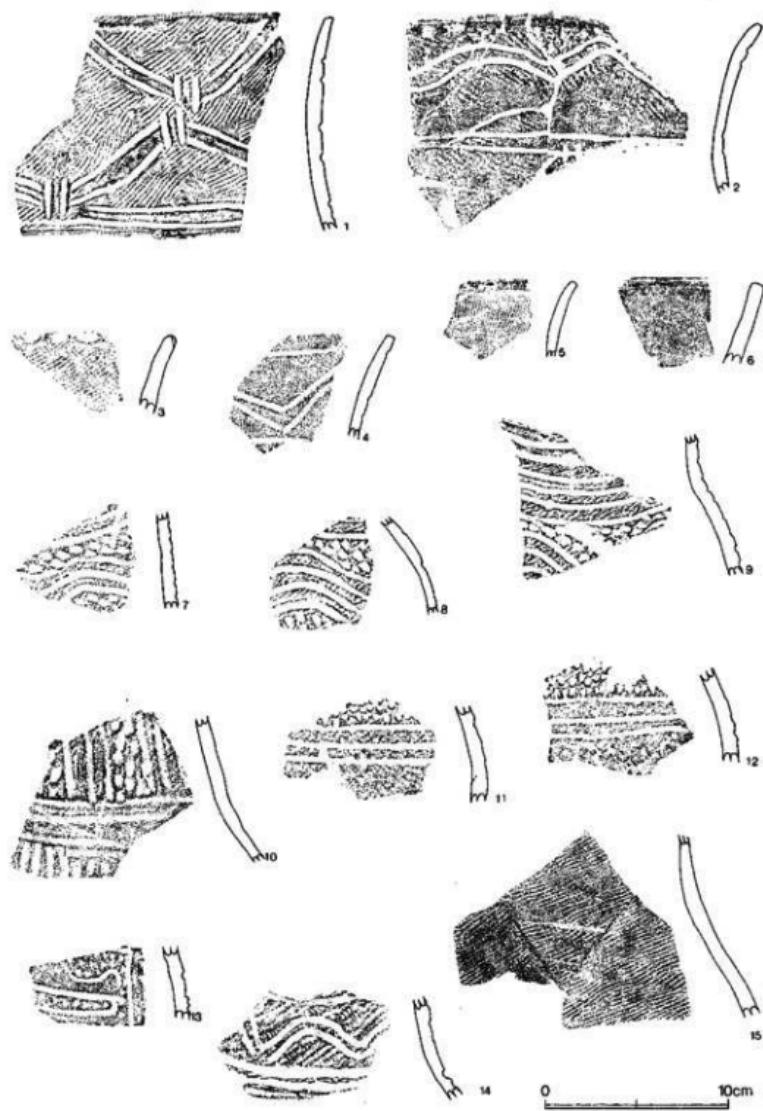
1は口縁部で口径30cm前後の菱形土器と考えられる。0段多条LRの繩文を地文とし、口唇部にも施す。斜・横方向に不安定ながら平行する沈線を施し、沈線間の繩文を磨消す。沈線の集合部分にも縱方向に短かい沈線を付け、変形工字文風である。内面には横・斜方向の拂で・範拂でが認められ、残存状態は良好である。胎土は砂粒、雲母粒子を含有する。色調はにぶい橙色～褐灰色を呈し、内外面に煤が付着するが煮沸による煤とは断定出来ない。

2は口径20cm前後となり、単節RLの繩文を地文とし、口唇部寄りに波状文を、頸部には横方向の沈線を施し、僅かであるが胴部から頸部へも斜方向の沈線を刻む。1の口唇部は平坦で繩文が施されていたが、2の口唇部は部分的に丸く修められている。内面は底部側から斜・縱方向の範削りが施されている。残存状態はやや不良で、胎土は白色粒子、砂粒、黒色柱状粒子を含有する。色調は破損後の被熱により破片により異なり、にぶい黄褐色～黒色を呈する。

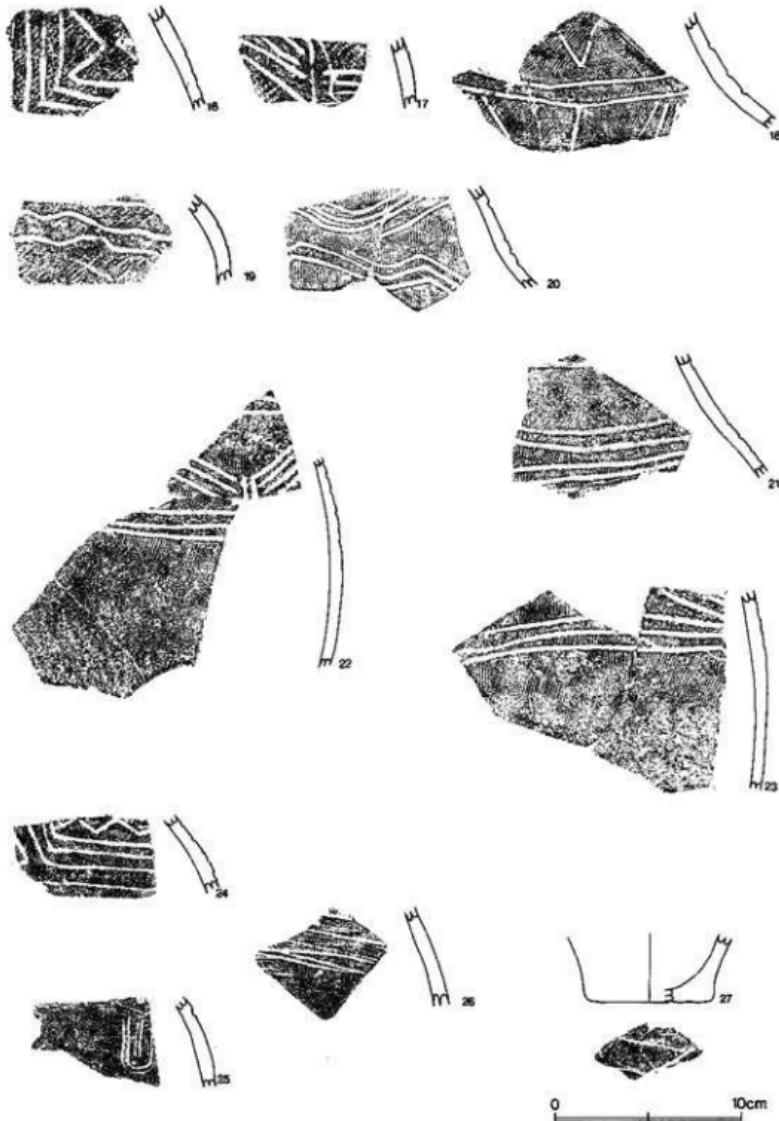
3は0段多条LRの繩文を施す口縁部であり、口唇部は内側に稜を持ち小さく外傾するが、外側から連続的に押捺されている。器面状態はやや不良で、胎土は石英粒子、白色粒子、赤色粒子、黒色柱状粒子を僅かに含有する。色調は褐灰色(にぶい橙色)を呈する。15と同一個体と考えられるが、両者には接合する面を持たない。

4・5は備目文が施され、4は横方向の沈線間に山形の沈線を施す。5は薄手である。4・5ともに残存状態はやや不良であるが、4の内面には横方向の範削りが施される。胎土は石英粒子・白色粒子・黒色柱状粒子を含有する。色調は4が黄灰色、5がにぶい橙色～褐灰色を呈する。

6は無文の口縁部である。器面状態はやや不良で、胎土は混入物が少ないが、黒色柱状粒子が僅かに含有する。色調は褐灰色を呈する。



第14図 2号溝出土遺物(1)



第15圖 2號溝出土遺物（2）

7～13は刺突文を施す一群で、7・8は同一個体と考えられ、単節LRの縄文を地文とし、波状文を施した後刺突を行っている。9は0段多条LRの縄文を地文とし、7・8と同じ作業を行っている。10の縄文は不明であるが、横方向の沈線の他に縦方向にも同様に幅広な沈線を施し、頭部には刺突を行う。11・12は同一個体と考えられ、横方向の沈線と刺突が、単節LRの縄文の上に描かれている。13は沈線により区画された文様内に刺突を施している。器面状態は7～9を除いてやや不良であるが、7～9、13の裏面は剥落が多い。11の裏面には粘土帶の接合痕が、12の裏面には横方向の窓撫でが認められる。胎土は7～9・11～13が、透明粒子、赤色粒子、黒色柱状粒子を、10が透明粒子、砂粒を含有する。色調は7がにぶい橙色、8が褐灰色(にぶい橙色～褐灰色)、9がにぶい橙色、10～12がにぶい黄橙色～橙色、13がにぶい黄橙色を呈する。10はグリッド出土と同一個体である。

14は壺形土器の頸部である。幅広の条痕状の平行沈線と波状沈線が、単節LRの縄文上に施される。器面状態は良好で、胎土は透明粒子、黒色柱状粒子を含有する。色調は黒色を呈する。

15は壺形土器の肩部である。3と同一個体である。

16は重四角文の内に幾何学的模様を施す。器面状態はやや不良で、胎土には砂粒を多く含み、透明粒子、黒色柱状粒子を含有する。色調は褐灰色(にぶい橙色)を呈する。裏面に粘土帶の接合痕が残る。

17は各方向からの沈線による文様が施される。地文は16同様単節LRの縄文で、器面状態はやや不良である。胎土は透明粒子、黒色柱状粒子を含有する。色調は黒褐色を呈する。

18は横方向、斜方向の沈線が0段多条LRの縄文上に施されている。器面状態は良好である。胎土は透明粒子、黒色柱状粒子を含有する。色調は橙色～黒色を呈する。

19は0段多条LRの縄文を地文とし、波状文を施す。胎土は透明粒子・赤色粒子・黒色柱状粒子を含有する。色調はにぶい黄橙色(黒色)を呈する。

20～23は衝目を地文とする。21～23は同一個体で、グリッドからも同一個体が出土し、22・23はそれらと接合した。衝目文上に平行・波状沈線を施す。器面状態は20が良好で他はやや不良、20の裏面は磨かれたように平滑である。胎土は20が透明粒子・黒色柱状粒子・赤色粒子を僅かに含み、21～23は砂粒が多く、他に白色粒子、黒色柱状粒子を含有する。色調は20が褐灰色～黒褐色、21～23がにぶい黄褐色～黒色を呈し、煤の付着が有り、胴部下半の剥落が多い。

24の地文は不明で、重四角文で区画された内部に山形文を施す。器面状態は不良で、胎土は透明粒子・黒色柱状粒子・白色粒子・赤色粒子を含有する。色調は灰白色～黒褐色を呈する。

25はU字状の条痕を施し、その上部には刺突を施す。器面状態は良好で、胎土は透明粒子・白色粒子・赤色粒子・黒色柱状粒子を僅かに含む。色調は褐灰色(にぶい黄橙色)。

26は条痕文で、器面状態はやや不良、胎土は透明粒子・黒色柱状粒子を含有する。色調は赤褐色(にぶい橙色)を呈する。

27は底部で木葉痕を残す。器面状態は良好で、胎土は透明粒子・赤色粒子を含有する。色調はにぶい黄橙色～褐灰色を呈し、裏面には炭化物の付着が有る。

3号溝(第16図)

M-10で確認され、ほぼ南北に通るが、北側は調査区外、南側は5号土坑により消失している。5号土坑以前に、本溝に統く遺溝は検出されていない。西側では4号溝と重複し、4号溝を切って構築されている。

規模は上幅1.5m前後、下幅40cm前後で、最大深さは25cmである。溝底面が東側に寄っている。

断面形は皿状を呈し、底面の傾斜はほとんど無い。

本溝の覆土は灰褐色であるが、浅間B火山灰層が落ち込んでいた。

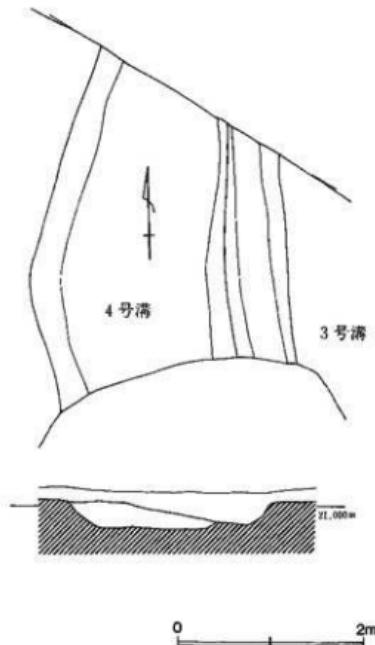
4号溝(第16図)

M-10で確認され、やや東へカーブして南北に通る。北側は調査区外、南側は5号土坑、東側は3号溝により消失している。5号土坑以前に、本溝に統く遺溝が検出されていないのは3号溝と同様である。

規模は上幅不明であるが2m前後と推定され、下幅は1.3m前後を呈する。深さは約30cmで、断面形は皿形を呈する。

覆土は3号溝と同じ灰褐色であるが、本溝の方がやや暗い。

遺物は斐形土器の破片が出上したが、図示できるほどではない。他に砾も出土している。



第16図 3号、4号溝平面図・断面図

3. 土 坑

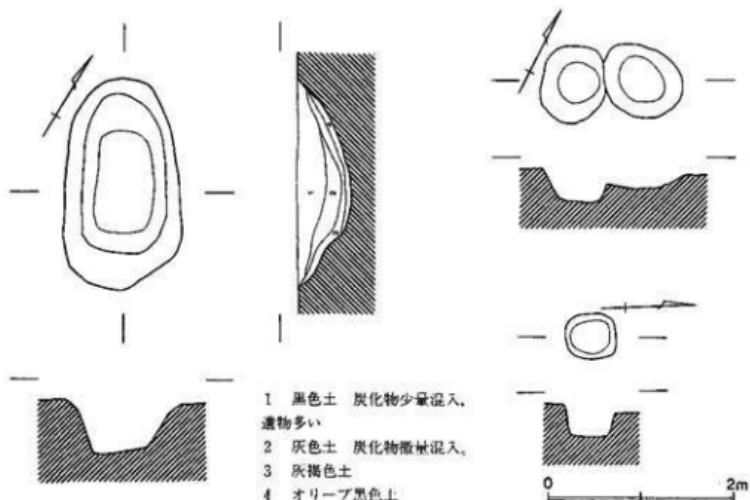
1号土坑(第17図・第18図)

T-16区に位置し、平面形は南東側がやや幅広い椭円形で、長軸の断面形は舟底状であるが、短軸のそれはU字形を呈す。ともに壁面中央に段がつく。

規模は、上幅2.24m×1.20m・下幅1.07m×0.60m・深さ0.58mを計り、軸方向は、N-30°-Wを示す。遺物が覆土中に散在している。

出土遺物

1は口縁部で、0段多条LRの繩文を施す。口唇部は平坦でやや外側に膨らむ。器面状態は良好で内面には窓撫での痕跡が残る。胎土は透明粒子・白色粒子・黒色柱状粒子を含有する。色調は黒褐色(灰褐色)を呈する。



第17図 1号(左)、2号(右上左)、3号(右上右)、4号(右下)、土坑平面図・断面図(標高21.000m)

2は斜方向に細かい条痕を施す口縁部である。器面状態は良好で内面には横方向の撫でが施される。胎土は雲母粒子、砂粒を含有する。色調はにぶい橙色～にぶい褐色を呈する。

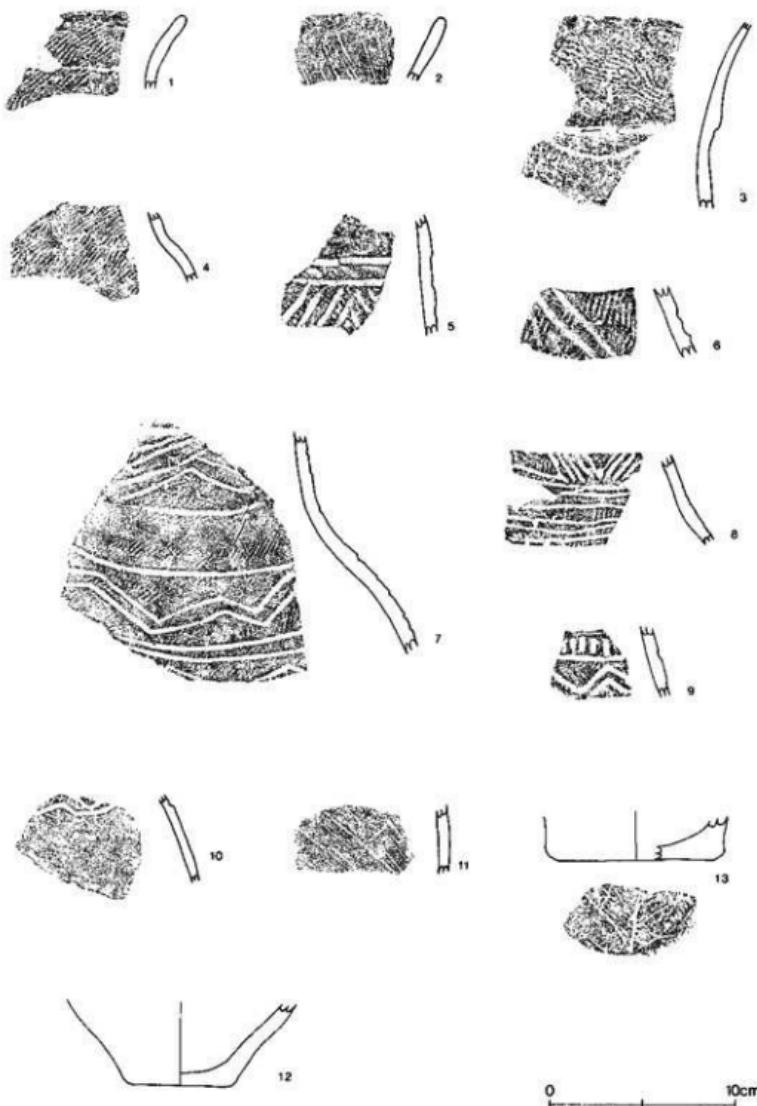
3は壺形土器の頸部で、単節LRの繩文を施す。中位に段を有し、段の下は沈線で横に範撫でされる。器面状態はやや不良で、内面が剥落するが、斜方向の撫でが認められる。胎土は赤色粒子が多く、白色粒子、黒色柱状粒子を僅かに含有する。色調はにぶい橙色～褐灰色を呈する。

4は0段多条LRの繩文を施す壺形土器の肩部である。器面状態は良好で、内面は横方向に撫でられ平滑である。胎土は赤色粒子・白色粒子・黒色柱状粒子を僅かに含有する。色調は黒褐色(灰褐色)を呈する。

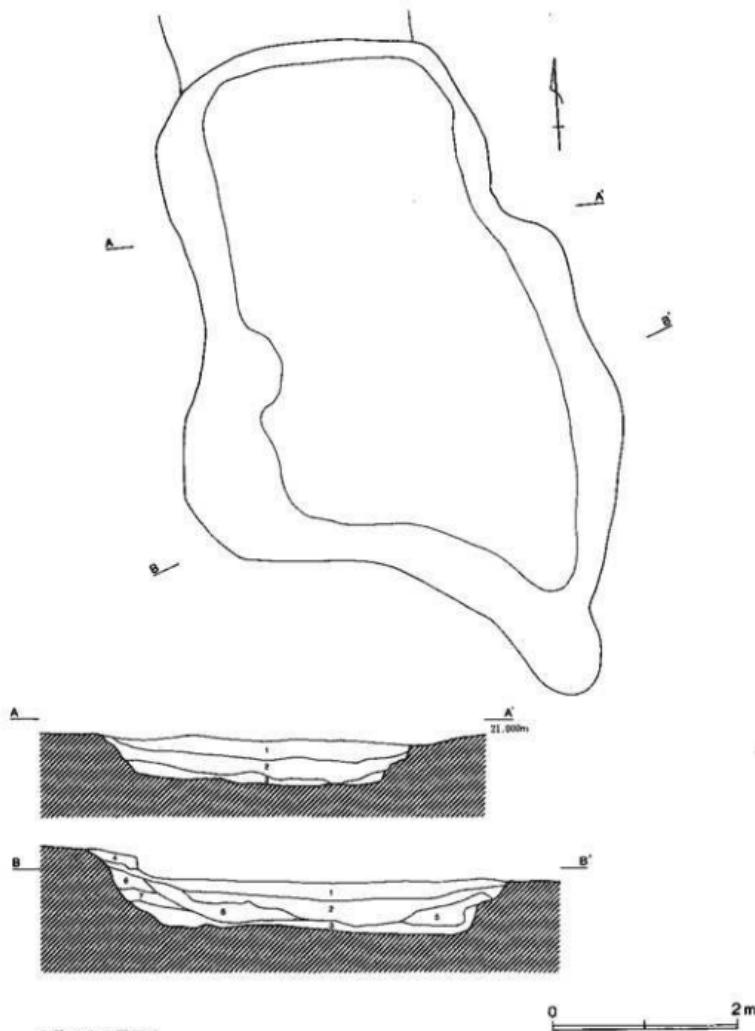
5～9は繩文を地文とし、平行・山形の沈線により文様を施す一群。繩文は5・6が単節RL、7・8が0段多条LR、9が単節LRである。器面状態はやや不良であるが、5・9の内面には横方向の撫でが、7の内面には斜方向の範撫でが施される。胎土はいずれの破片も、石英粒子・白色粒子・赤色粒子・黒色柱状粒子・砂粒を含有する。色調は5が橙色～黒褐色、6は灰白色だが胎土の黒色が一部現われる。7は灰白色～橙色～黒褐色(灰白色)、8は褐灰色(灰白色～明褐灰色)、9はにぶい褐色～黒褐色(にぶい橙色)を呈する。

10には繩文は認められず波状文が施されている。器面状態は良好で、内面には横方向の撫でが認められる。胎土は透明粒子・赤色粒子を含み、黒色柱状粒子を僅かに含有する。色調は褐灰色～黒褐色を呈する。

11は条痕を施こし、胎土が2に類似する。器面状態はやや不良で、色調はにぶい橙(褐灰色)を呈



第18図 1号土坑出土遺物



5号土坑土層説明

- 1 灰色土 酸化沈植物・管状斑入、火山灰粒子少量混入
- 2 噴オリーブ灰色土 黒色土ブロック、火山灰粒子僅量混入
- 3 暗緑灰色土 噴オリーブ灰色上ブロック多量混入、黒色上ブロック少量混入
- 4 灰褐色土 酸化沈植物多い、火山灰粒子少量混入
- 5 黒色土 オリーブ色気味、暗緑灰色土・黒色上粒子・ブロック多量混入
- 6 オリーブ黒色 噴緑灰色土・黒色土少量混入
- 7 黒色土 噴緑灰色土ブロック少量混入

第19図 5号土坑平面図・断面図

する。

12・13は底部で、13の底部には木葉痕が残るが12は器面状態不良で不明である。胎土は12が赤色粒子・砂粒を多く含み、13は僅かに赤色粒子・透明粒子を含有する。色調はにふい橙色～褐灰色(12が灰白色、13が褐灰色)を呈する。

2号土坑(第17図)

S-16区に位置し、3号土坑と重複する。平面形は楕円形を、断面形は逆台形を呈する。

規模は、上幅90cm×70cm・下幅56cm×44cm・深さ37cmを計り、西北西～東南東方向に長い。

3号土坑と重複しているが断面では新旧が判別出来なかった。本土坑からは自然石が2個と胡瓜の種子が出土したが、3・4号土坑とともに時期は不明。覆土は灰色土。

3号土坑(第17図)

S-16区に位置し、4号土坑と重複する。平面形は楕円形を、断面形は皿状を呈し、壁と底の区別が難かしい。

規模は、上幅84cm×70cm・下幅44cm・深さ11cmを計り、南北方向に長い。遺物は皆無である。覆土は灰色土。

4号土坑(第17図)

S-16区に位置し、平面形は隅丸方形を、断面形は逆台形を呈する。

規模は、上幅54cm×47cm・下幅40cm×36cm・深さ36cmを計り、南北方向に長い。底の平面形は不整形である。遺物は獸骨の頭部が出土したが種別は判定出来なかった。覆土は灰色土。

5号土坑(第19図)

M-10・11区に位置し、3・4号溝と重複する平面形は不整形で、壁面は、段を持ったり、直線的になったり様々である。

規模は、最大上幅7.70m、深さ90cmを計る。遺物は、桃の種子、獸骨片、貝、礫、木片が出土し、特に円標(握拳大から直径15cm程)が多い。重複する溝に伴う土器片は出土したが、浅間B火山灰層を切って構築されていることから、時期は平安時代末以降である。

4. グリッド出土遺物(第20図～第30図)

本遺跡では前述した遺溝以外の場所からも多量に遺物が出土し、その数は遺溝出土遺物の数を圧倒している。しかし、その出土位置は調査区東側に片寄り、P区以西からは奈良・平安時代の遺物が若干数出土しただけである。Q区からの出土数も少なく、R・S・T区に集中している。

遺物は集中することなく、R区以東に散在し、平面・断面の観察から遺構の検出に努力したが確認出来なかった。またR区以西からの遺物の出土が少なかった点は、一般的な生活領域外である事を示している。グライ化した土層(14層)面がR区より低い点やプラントオバール分析から水田跡の可能性が示されたが、12～14層がR区より高いM区以西に遺物の出土が無い事も、検出された溝の性格を考える上で参考となろう。

以下、出土遺物を部位、文様順に図示する。

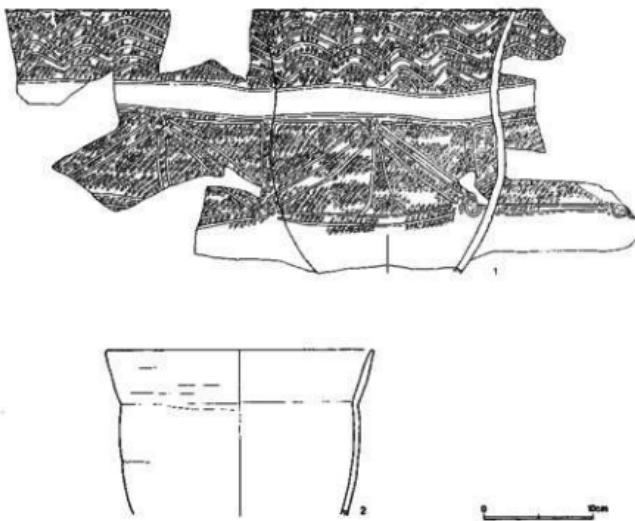
出土遺物

1は壺形土器で、口径は cmを計る。口唇部は外方から連続的に押捺され、口縁部は複線波状文が施される。胴部上位には2本の沈線により口縁部と胴部を区切り、沈線間は縄文(0段多条LR)を磨消す。胴部は沈線による幾何学的模様を文様とする。被熱のため、胴部内外面は器面が荒れている。胎土は赤色粒子・白色粒子・透明粒子・黒色柱状粒子を含有するが、いずれも僅かな量である。色調は灰白色～赤橙色を呈する。

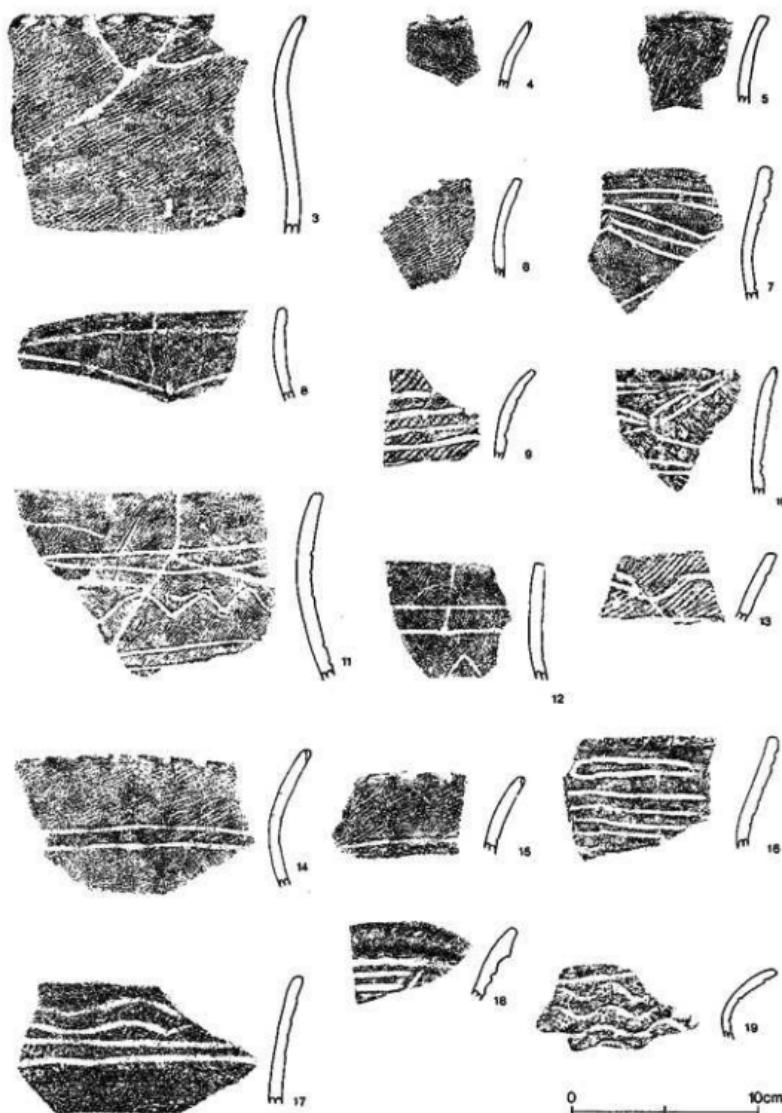
2は深鉢形土器の胴部上半で、推定口径 cmを計る。文様は無く、口縁部外面には粘土帯の接合痕が部分的に残る粗製な土器である。残存状態やや不良で、胎土は白色粒子・黒色柱状粒子を含有し、他に粗い砂粒(1～5 mm大)を含み、器壁面に突き出る。色調は灰白色～黒褐色(黒色)を呈する。

3～6は縄文を施す口縁部で、3は壺形土器である。4が0段多条RL、他が0段多条LRの縄文で、5は口縁部にも施す。3・4は口唇部に外面から連続的に押捺されている。いずれも器面状態はやや不良である。胎土は3～5が赤色粒子・白色粒子・透明粒子を含有し、黒色柱状粒子も僅かに含む。6は透明粒子・砂粒を含有する。色調は3がにぶい黄橙色～黒褐色(灰白色～橙色～黒褐色)、4が橙色～黒褐色(灰白色)、5が橙色(にぶい黄橙色)、6が灰黄褐色(褐灰色)を呈する。

7・8は地文を縦方向の櫛で描き、横方向・山形に沈線で文様をついている。7は口唇部へも櫛



第20図 グリッド出土遺物(1)



第21図 グリッド出土遺物（2）

目を付ける。8は変形工字文になるであろうか。8の器面状態はやや不良であるが、内面下位に削り状の範囲で認められる。7の内面は磨かれたように平滑である。胎土は7が透明粒子・黒色柱状粒子を含有する。8は多くの砂粒と透明粒子を含有し、黒色柱状粒子を僅かに含む。色調はにぶい黄橙色～褐灰色を呈する。

9～15は縄文を地文とし、その後沈線で文様を描く一群である。縄文は9が単節LR、10が単節RL、11～15が0段多条LRで、9の縄文は口唇部にも及ぶ。11と12、14と15は同一個体であるが、両者は接合する面を持たない。10・14・15は口唇部に連続的な押捺を行う。10は変形工字文、11・12は波状文に近い山形文、13は波状文を施し、12の沈線は右→左方向に引く。器面状態は10・14・15がやや不良であるが、他は良好である。胎土は9が透明粒子・雲母粒子を、10が多くの砂粒に、僅かな黒色柱状粒子・赤色粒子を、11・12・14・15が多くの赤色粒子に僅かな透明粒子・黒色柱状粒子を、13が僅かに赤色粒子・白色粒子・黒色柱状粒子・透明粒子を含有する。色調は9が橙色～黒褐色(灰白色～黒色)、10はにぶい橙色～灰黄褐色、11・12は破損後に熱を受け、破片各に色調が異なり、にぶい黄橙色～橙色～黒褐色、13はにぶい黄橙色～橙色、14・15は褐灰色～黒褐色を呈する。

16～19は沈線による文様の一群で、17～19は器面状態不良のため縄文の存否は不明。19の口縁部は外反が強い。胎土は16が粗い砂粒と僅かに黒色柱状粒子を、17・18が赤色粒子と僅かに透明粒子を、19が砂粒・雲母粒子・石英粒子を含有する。色調は16が黒色、17がにぶい黄橙色、18がにぶい黄橙色(褐灰色)、19がにぶい橙色を呈する。

20・21は同一個体と考えられるが、接合する面を持たない。2条の平行沈線を縱方向に施すが、その他細かい条線が縱走し、口唇部寄りには極めて細い半截竹管の背あるいは腹側により波状文を施す。口唇部は上方から連続的に押捺される。器面状態は良好で、内面には横向方向の範囲でが施されている。胎土は石英粒子・雲母粒子・砂粒を含有する。色調はにぶい黄橙色～黒褐色(にぶい橙色)を呈する。

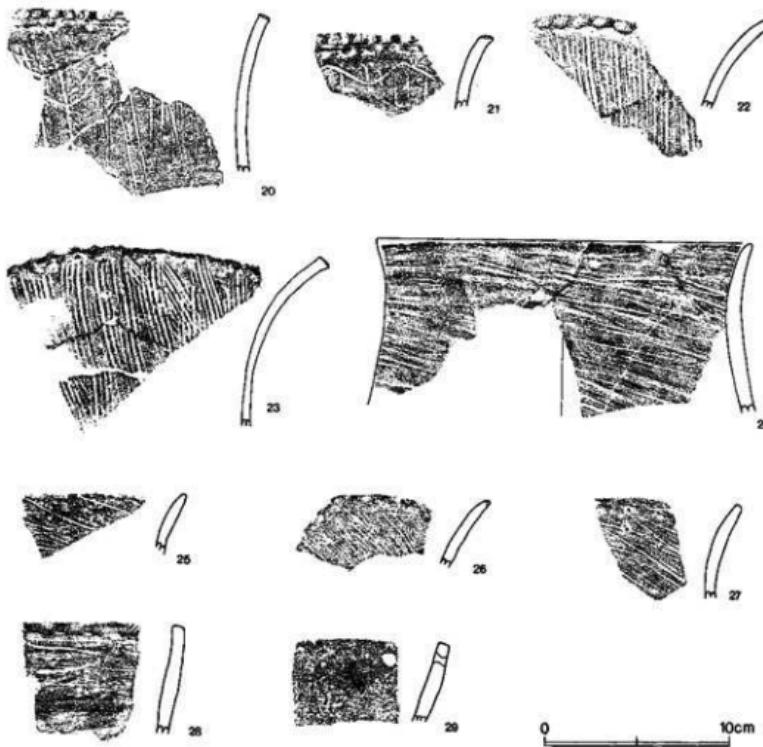
22・23も同一個体であるが接合しない。口縁部は上方から連続的に押捺され、5本単位の櫛状沈線が口唇部から脣部方向へ縱走する。器面状態はやや不良で、胎土は粗い石英粒子、僅かに雲母粒子・砂粒を含有する。色調は褐灰色～黒褐色を呈する。

24は口縁部がゆるやかに外反する變形土器で、器面には条線が横走し、模様も残る。器面状態は良好であるが、内面は器面が粗い。胎土は砂粒・赤色粒子を含有する。色調は褐灰色～黒褐色(にぶい橙色～明褐灰色)を呈する。

25～28は器面に条線を有する一群で、25～27は斜方向に、28は浅く横方向に引かれる。26の口縁部は外方から連続的に押捺される。器面状態はいずれもやや不良で、胎土は25～27が石英粒子・雲母粒子・砂粒を含有し、26は雲母粒子・砂が多く、黒色柱状粒子も僅かに含む。28は白色粒子・砂粒・黒色柱状粒子を含有する。色調は25がにぶい黄橙色～黒褐色(褐灰色)、26がにぶい褐色～灰褐色(にぶい黄橙色～黒褐色)、27がにぶい橙色、28が褐灰色(灰黄褐色)を呈する。

29は無文で、口唇部寄りに穿孔がみられる。器面状態はやや不良で、胎土に赤色粒子・黒色柱状粒子・白色粒子を含有し、色調は灰白色～褐灰色を呈する。

30～33は0段多条LRの縄文を地文とし、縦横方向に隆起を貼り付け、沈線により区画された文様

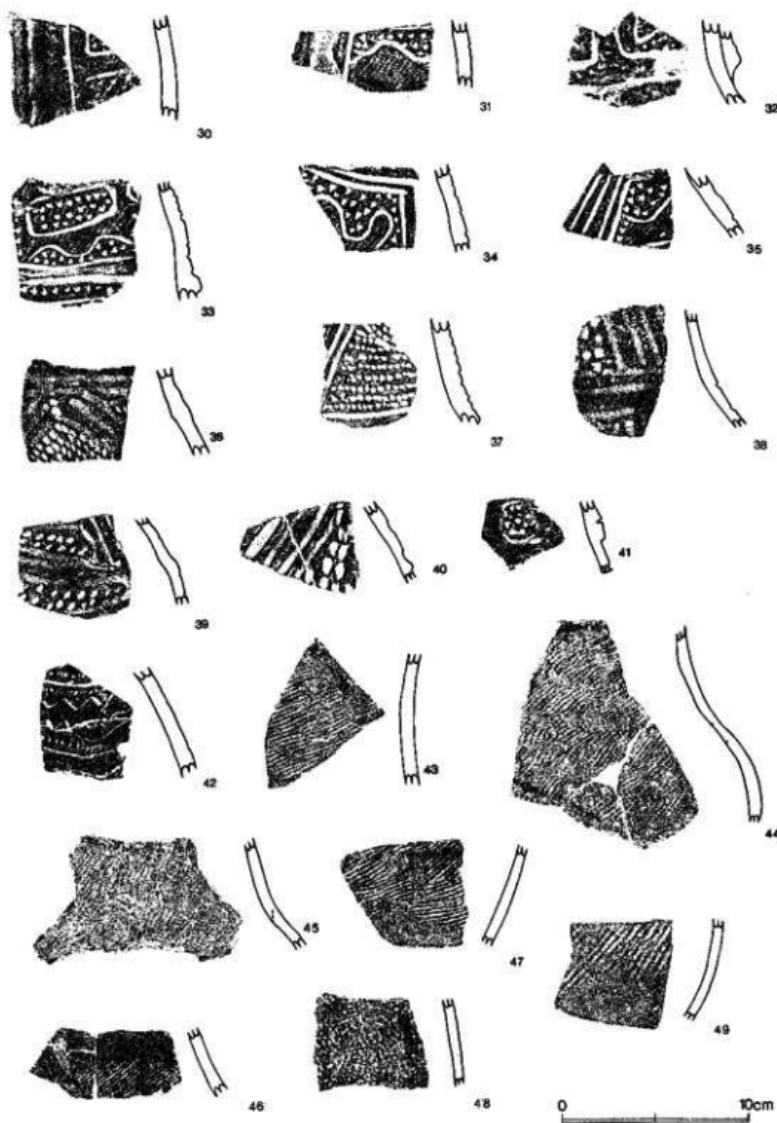


第22図 グリッド出土遺物（3）

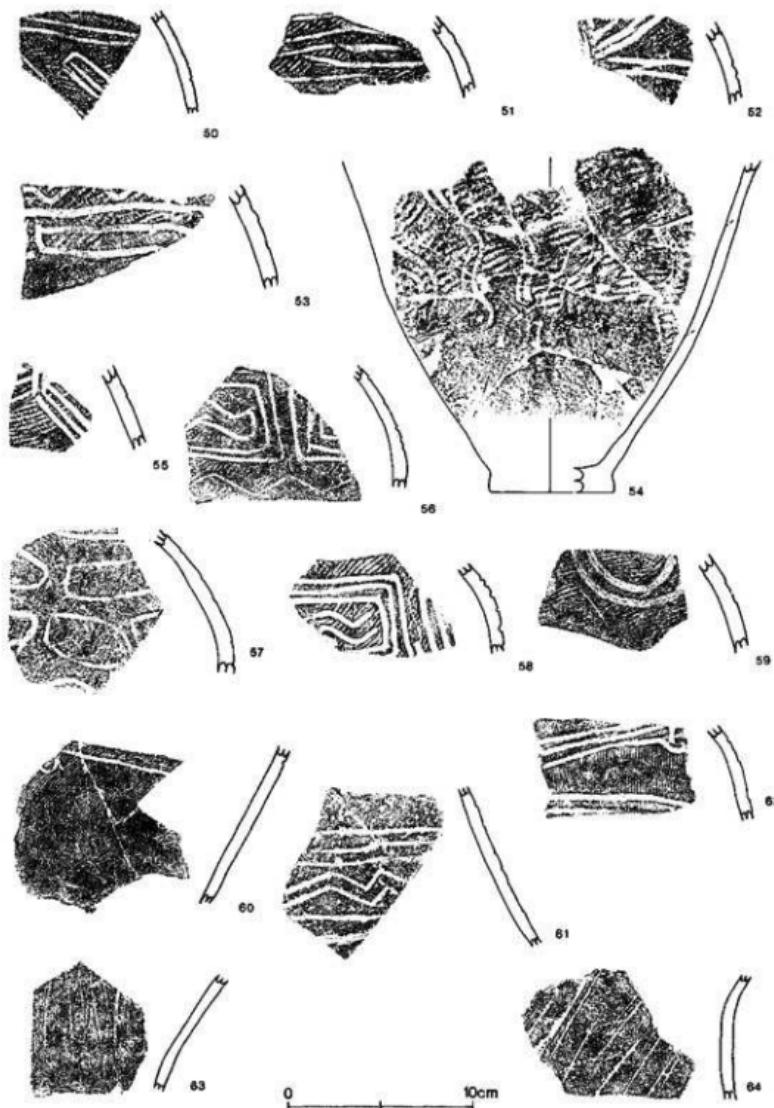
内に刺突を施す一群で、住居跡出土5とともに同一個体と考えられるが接合しない。1・2の左側は隆帯が剥落している。器面状態はやや不良で特に内面はほとんど剥落している。胎土は透明粒子・赤色粒子・黒色柱状粒子を含有し、僅かに粗い砂粒を含む。色調は灰白色～にふい黄橙色を呈する。34・35は隆帯は無いが、30～33、2号溝出土13と胎土・色調等が類似する。

36・37は沈線による区画内に刺突を充填させており、37は押し引きで連続させている。器面状態はやや不良で、胎土は赤色粒子・黒色柱状粒子・白色粒子を含有し、36は透明粒子も含まれている。色調は36が明褐灰色（褐灰色）、37がにふい橙色（にふい黄橙色）を呈する。

38～40も沈線と刺突文が施され、刺突がやや大きい。38は2号溝出土と同一個体である。39・40



第23図 グリッド出土遺物(4)



第24図 グリッド出土遺物（5）

ともに器面状態は不良である。胎土は39が36と同様で、40は混入物少ない。色調は39が黒褐色、40が褐灰色を呈する。

41はボタン状の円形浮文に円形の刺突を充填させる。浮文に接して擦痕が付く。器面状態はやや不良で、胎土は僅かに透明粒子・黒色柱状粒子を含有する。色調は黒褐色(灰白色)を呈する。

42は沈線で、波状・山形文を描き、連続的に爪形の刺突文を施す。器面状態は良好であるが、内面は剥落が多い。胎土は僅かに白色粒子・透明粒子を含有する。色調は灰褐色～黒褐色(灰褐色)を呈する。

43～49は繩文が施文されており、43～47は0段多条LR、48は単節LRである。46～49は部位が判然としない。器面状態はやや不良であるが、44・45の内面には粘土帯の接合痕が残る。胎土は43～46、48が僅かに白色粒子・透明粒子・赤色粒子・黒色柱状粒子を、47が雲母粒子・石英粒子を、49が白色粒子・砂粒・黒色柱状粒子を含有する。色調は43がにぶい褐色～黒褐色(にぶい橙色)、44が橙色～黒色(にぶい褐色～褐灰色)、45が褐灰色(にぶい黄褐色)、46が褐灰色、47が褐灰色～灰褐色、48がにぶい橙色～黒色、49がにぶい橙色～褐灰色を呈する。

50～55は単節LR、56～60は0段多条LRの繩文を地文としている。いずれも太い範描沈線・条痕で文様を施している。文様は平行直線文、波状文、山形文、重弧文、方形文、変形工字文、曲線文等がみられる。54は深鉢形で輻方向に波状の条痕文を施し、底部寄りは範削りされる。須和田式土器であれば他に例をみない。器面状態はやや不良で、52の内面にアトランダムな範撫でが認められるが、他は器面が荒れている。胎土は50が白色粒子・黒色柱状粒子を、51が赤色粒子・透明粒子・白色粒子を、52が僅かに透明粒子を、53が黒色柱状粒子・透明粒子・白色粒子を、54が粗い石英粒子・僅かに黒色柱状粒子・雲母粒子を、55が砂粒・黒色柱状粒子を含有する。色調は50が褐灰色(灰褐色)、51が灰白色～橙色(褐灰色)、52が褐灰色、53が褐灰色～黒褐色(灰褐色)、54がにぶい橙色(にぶい橙色～黒褐色)、55が灰褐色～黒褐色を呈する。

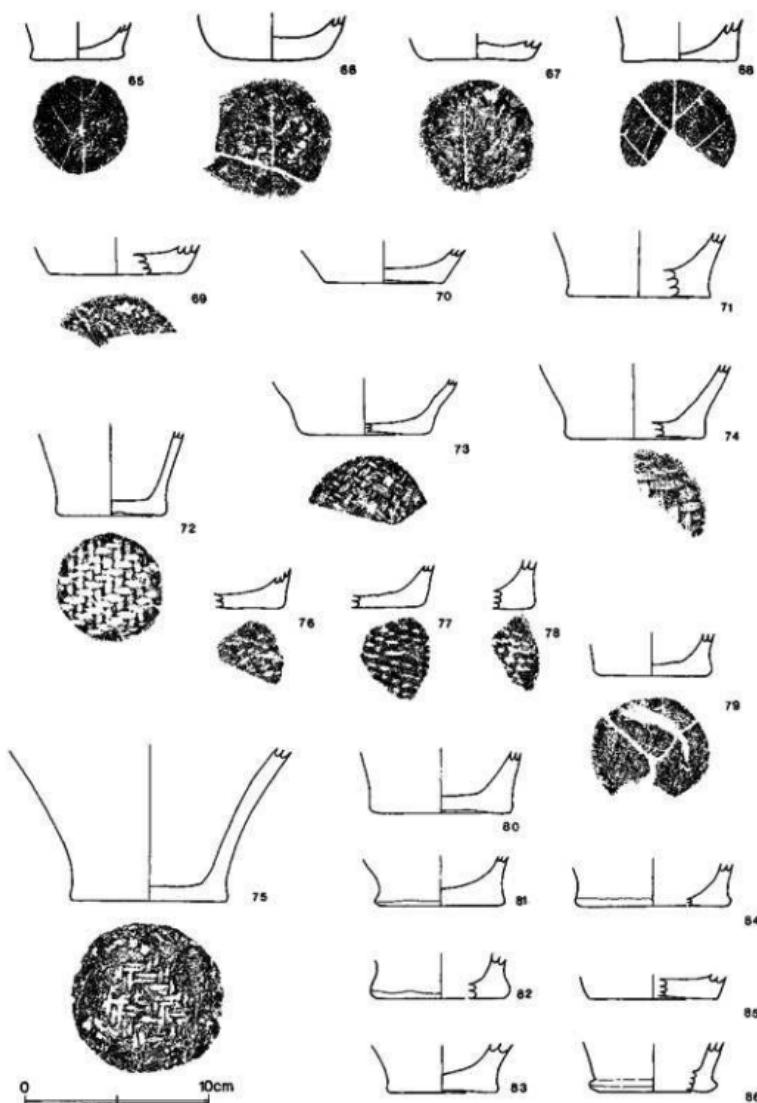
56～60はいずれも器面状態やや不良であり、57の繩文は不鮮明である。また60は2号溝18と同一個体と考えられる。胎土は56・57が赤色粒子・黒色柱状粒子・白色粒子・透明粒子を、58が黒色柱状粒子・透明粒子を、59が白色粒子・透明粒子を含有する。色調は56がにぶい橙色～黒褐色(にぶい黄褐色)、57がにぶい橙色～褐灰色(黒褐色)、58が褐灰色(にぶい黄褐色)、59が褐灰色、60が橙色～黒褐色を呈する。

61は沈線による文様の土器で、器面状態はやや不良で、胎土は赤色粒子を多く含み、黒色柱状粒子・白色粒子を僅かに含む。色調は灰白色～にぶい橙色を呈する。

62は櫛目により地文が施され、沈線による文様が加えられている。器面状態はやや不良で、砂粒を多く含み、透明粒子・白色粒子・黒色柱状粒子は僅かである。色調は褐灰色～黒色を呈する。

63・64は条線が施され、器面状態はやや不良である。63は胎土に雲母粒子・粗い石英・砂粒子を、64は砂粒・黒色柱状粒子・石英粒子を僅かに含有する。色調は63が褐灰色、64が黒褐色～黒色を呈する。

65～71は木葉痕、72～78は網代、79・80は布痕を残す底部である。81～93の底部については不明。92・93は焼成前に穿孔を行っている。



第25図 グリッド出土遺物（6）

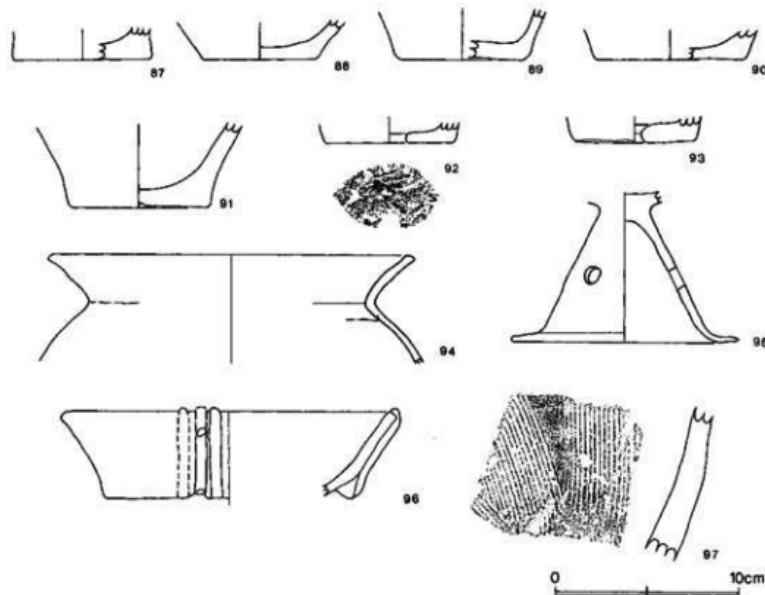
94は壺形土器の口縁部で、口唇部は肥厚し、口縁部から胴部への移行は屈折的である。にぶい黃橙色を呈し、胎土には砂粒を含有する。胴部内面には粘土帯の接合痕が残る。

95は高杯形土器の脚部で、穿孔は3方向である。胎土は砂粒を含み、にぶい橙色を呈する。器面状態や不良で磨きの痕跡を僅かに認める。

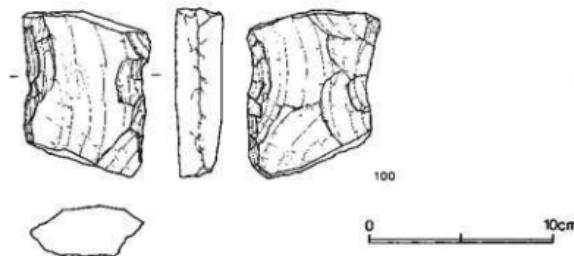
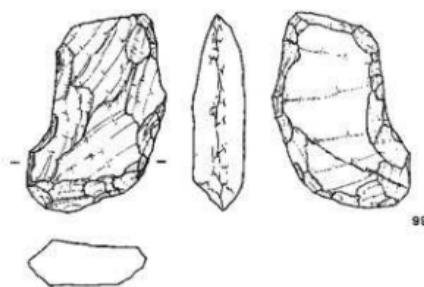
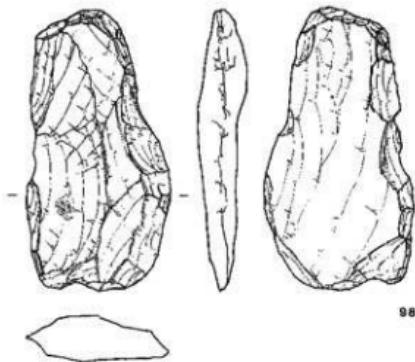
96は壺形土器の口縁部である。縱方向に3本の棒状の貼付けを行い、口縁部下端の段も貼り付けによる。器面状態不良で、胎土には石英粒子・砂粒子を含み、色調は橙色を呈する。D-4区出土。

97は捕鉢で、胎土は白色～灰白色で混入物無く、内外面に鉛錫が施される。美濃産。

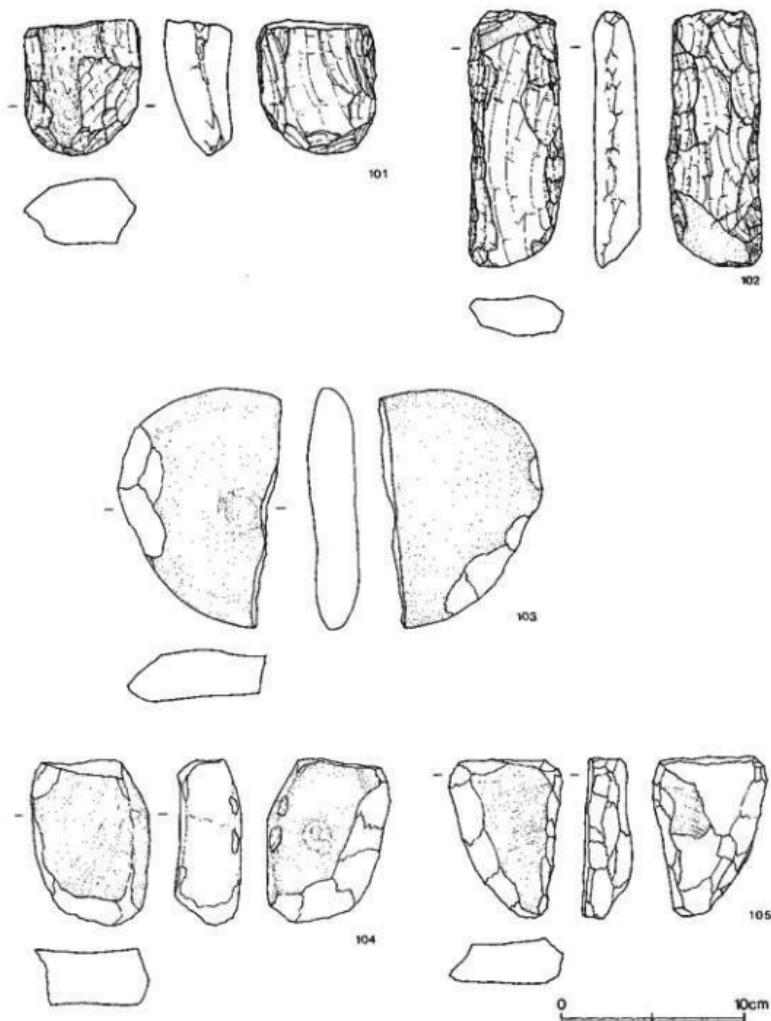
98～102は打製石斧である。98は最大長15.3cm・最大幅8.1cm・最大厚2.5cm・重量337gを計り、撮影形を呈する。表裏面とも大きな剥離がほとんどで、基部に小剥離が認められる。刃部・側縁ともに調整が少なく粗雑なつくりである。99は最大長10.0cm・最大幅6.0cm・最大厚2.8cm・重量248gを計る。肉厚で撮影に近似する形態を呈するが刃部が傾く。100は基部と刃部を欠損し、残存部最大長9.1cm・最大幅7.0cm・最大厚2.5cm・重量231gを計る。抉れ部分から分銅形を呈する。表面に僅かながら凹があり、破損後に再利用されたこと考えられる。101は基部が欠損する。残存部最大長7.4cm・最大幅6.4cm・最大幅3.7cm・重量218gを計る。肉厚で表面には原石面を残す。102は最大長14.0cm・最大幅7.1cm・最大厚2.5cm・重量255gを計る。幅に対して長さの長い細身の短筒形を呈する。刃部は原石面か研磨面か風化しており判然としない。石質はホルンフェルス。



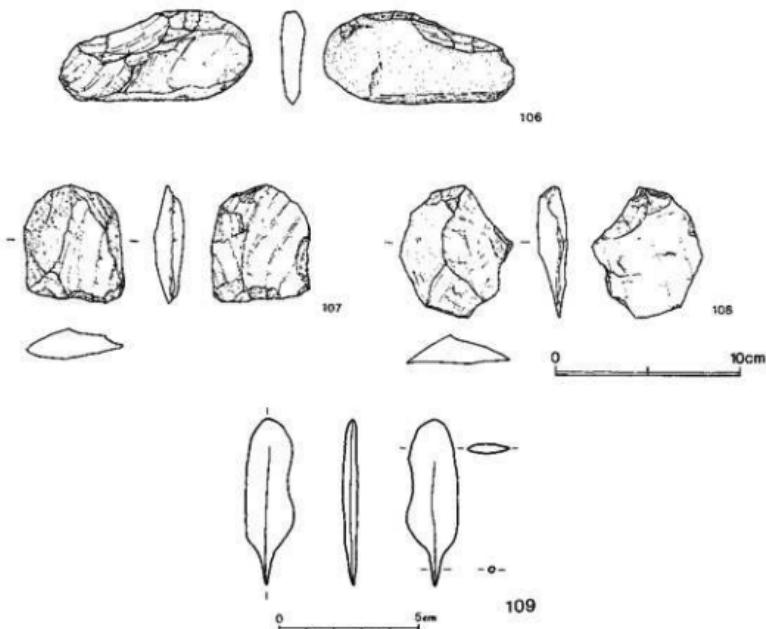
第26図 グリッド出土遺物(7)



第27図 グリッド出土遺物 (8)



第28図 グリッド出土遺物（9）



第29図 グリッド出土遺物 (10)

103は凹石で、最大幅13.0cm・最大厚2.6cm・重量391gを計る。扁平な円礫を利用しており、約半分が欠損している。石質は安山岩。

104・105は砾石で、104は最大厚3.5cm・重量282g、105は最大厚2.5cm・重量139gを計る。104は表裏面および側面の一方が使用されており、裏面には打痕状の凹がある。105は表裏面が使用されているが、裏面は破損のため小範囲しか残存しない。石質は安山岩。

106は石包丁と考えられる。最大長10.3cm・最大幅5.0cm・最大厚1.2cm・重量82gを計る。梢円形の扁平な礫を使用し、表面および裏面の一部に原石面を残す。刃部は研磨され、僅かに内湾する。頂部右側は大きく剝離されている。石質はホルンフェルス。

107・108は剥片で、表面に原石面を残す。107は最大長6.3cm・最大幅5.2cm・最大厚1.6cm・重量56gを計り、4側縁とも比較的鋭利な剥片石器。107は裏面に主剥離面を残し、重量50gを計る。石質はホルンフェルス。

109は銅錆で須和田式土器のみを出土する包含層から出土した。全長2.90cm・身長2.30cm・茎長0.60cm・最大幅0.87cm・最大厚0.24cm・重量1.91gを計る。柳葉形を呈し完形であるが、右側縁は抉れている。茎から身への移行は滑らかで、明瞭な変換点を持たない。身中央の錆は両面とも残るが不明瞭で先端へ及ばない。

V 結 語

本遺跡は発掘調査の概要でも述べたように、河川の氾濫原上に位置するため、平地でありながら、浅間B・C火山灰層に挟まれた土砂は、場所によっては1 mを越えた。また、土器破片を含む包含層が20cm前後あり、遺構の検出には労力を要した。検出された遺構、遺物については前章で既に記述しているので、ここではこれらについて簡単にまとめておきたい。

検出された遺構は、住居跡1軒、溝跡4条、土坑跡5基であるが、このうち時期の伴明したもののは住居跡と溝跡2条、土坑跡1基についてで、出土土器から弥生時代中期の須和田期であった。

住居跡は隅九長方形プランで4本の主柱穴、炉、貯蔵穴を持つ典型的な形態を呈するが、炉が短軸の柱穴間側に位置し、炉の東南側の短軸に対して対称の位置に浅い溝状の落ち込みを持つという特徴を持っており、特に後者は他に例がない。また焼失住居であるが、住居廃絶後時間を経てからの焼失である。県内における須和田式土器を伴う住居跡の調査例は少なく、南遺跡¹⁾、池上遺跡²⁾などがあり、県外でも例が少ない。

溝は2本とも直線的で、特に2号溝はほぼ南北を通り、発掘する以前は条里に関係する遺構という指摘もあった程である。1号・2号溝とも類似する形態で、一般的に環濠・条濠と呼ばれている。今回の調査で検出された溝は、全容が明らかにされた訳ではないが、条濠に区分されよう。これら濠の性格については、防禦施設³⁾、住居区画⁴⁾、土地所有のための慣行⁵⁾、などが考えられているが。本遺跡の2本の溝は、溝内に水が溜った痕跡があり、真底も僅かながら遺存していた。1号溝には本調査区には認められない砂の堆積があり、水が流れたと考えざるをえない。また調査区限界における溝断面の観察では、土壟の存在は認められず、溝付近には柱穴痕もなく、柵の存在も否定的である。以上の事例から、本調査区で検出された2本の溝に防禦的性格を与えるには不充分であり、灌漑的な性格をも考える必要があろう。いずれにしても溝の全容が明らかにならぬ限り推量の域を出ない。

1号土坑は平面プランがやや不整形な橢円形で、断面は舟底状で、壁面には凹凸がある。同じく須和田式土器を出土しているが、掘り方は不安定で、形状・遺物出土状態から、いわゆる土器溜状遺構と考えられる。

出土した土器は、古墳時代初頭・奈良平安時代・近世の時期のものも若干数あったが、ほとんどが須和田式土器である。須和田式土器は杉原莊介氏によって、当初土師器の型式名称として与えられていたものであるが⁶⁾、昭和17年に須和田遺跡出土の最古の弥生式土器に「須和田式土器」の名称を与え、それまでの須和田第I式土器・第II式土器を、それぞれ真間式土器・国分式土器に変更した⁷⁾。須和田式土器の概念は、集落遺跡出土例がほとんどないために、いまだに不明瞭な部分も残るが、「考古学集刊」第三巻四号⁸⁾、千葉県天神前遺跡⁹⁾および栃木県出流原遺跡¹⁰⁾等の報告によっておよそ知ることが出来る。

須和田式土器は杉原氏によって現在A類・B類に2類別されているが¹¹⁾、本遺跡出土の土器はいくつかの大形破片があるだけで、多くが小破片であり、器形・文様の全容がわかる例はほとんどなく、

使用時においての共伴・セット関係をつかむことも出来なかった。

彫形土器は肩部から頸部への移行は全体的に緩やかで、内面の器壁に剥落が多い点が特徴である。口縁部・頸部に隆帯が付され、刺突文が施される土器は、縱方向の隆帯としては出流原遺跡に例があるが、縱・横方向の例は初めてである。繩文を地文とし、沈線によって各種の文様が施される土器が多い中で、繩文だけで他の文様を施さない土器もある。出流原遺跡では、第11号墓壙第10例土器、第22号墓壙第2例土器に例がある。また胴部下半の無文部分には条痕はみられず、僅かに範削り痕があるあるいは整形が全く確認出来ない場合が多い。器形的には杉原氏のいうA類、文様的にはB類が多いといえる。

彫形あるいは深鉢形土器に区分される土器が多い点も、本遺跡の特徴である。壺形土器同様に沈線による波状文、山形文、平行文、変形工字文状の菱形・三角形文を施す土器が多い中で、住居跡からは無文の彫形土器が出土し、日常一般的にはこのような粗製の土器が用いられていた可能性を示した。グリッド出土2も同様な粗製の深鉢形土器である。その他、条縞・条痕文を施す例もあり、群馬県岩櫃山遺跡例¹³⁾や、繩文時代末期の粗製土器との関係も指摘出来る。他に口縁部に連続的な押捺を施す繩文だけの例もあり、壺(深鉢)形土器の多様性が伺える。グリッド出土1の土器は唯一実測した大破片で、%が残存する。底部および胴部下端は欠損しており、被熱により下半が荒れている。出流原遺跡第22号墓壙第6例土器が類似するが、本遺跡出土例は文様が密でより複雑である。

底部に関しては木葉痕が最も多く、次いで網代痕、布痕、範整形の順で少なくなる。また焼成前に穿孔を行った例があることは注目されよう。

県内には須和田式土器を出土する遺跡は多くない。この期の土器をまとめて出土した遺跡としては、上敷免遺跡¹⁴⁾、飯塚遺跡¹⁵⁾、三ヶ尻上古遺跡¹⁶⁾、南I遺跡¹⁶⁾、南II遺跡¹⁷⁾、村後遺跡¹⁸⁾が知られる程度である。

石器は住居跡および、須和田式土器包含層より出土した。須和田期の石器は、これまで集落跡の調査例が少ないこともある、あまり知られなかったが、住居跡からは、石皿・磨石のセット、石斧、敲石、石鎌、砾器、石包丁の出土があった。石包丁には紐孔が認められないが、片側長辺のみに研磨された刃部を有する点から断定した。21のような形態の石器を知らないが、20と接合したことは興味深い。遺構外からも石包丁、石斧、凹石、砥石の出土があり、石包丁の存在を除けば、繩文時代における石器の組合と何ら変わらない。須和田期における石器は出土例がほとんどなく、比較出来なかったが、さきたま資料館調査区内からも多数出土している。

銅鏡はR-15区の須和田式土器のみを出土する包含層から出土した。僅かながら出土した五領期の遺物との関係を説く意見もあったが、両者の遺物包含層は明らかに区別され、混亂・遺構の検出が無い点から須和田式土器に伴う遺物と考える必要があろう。弥生時代の銅鏡については、合田芳正氏¹⁹⁾、大庭康夫氏²⁰⁾による集成がある。それによれば銅鏡の分布の東限は兜塚遺跡²¹⁾であるが、弥生時代中期に限ってみれば、他に類例がなく本出土例が東(北)限になる。埼玉県内では、霞ヶ関遺跡から2例²²⁾、水深遺跡²³⁾、南通遺跡²⁴⁾から各1例が出土しているが、これらは弥生時代後期あるいは五領期に層すると考えられており、本遺跡例とは時期的な隔たりがある。

以上、池上西遺跡の調査結果についてのまとめを記してみた。須和田式土器は出流原遺跡出土の

土器に類似する例が多く、その後半に位置づけられると考えられるが、条痕・条線・無文・繩文だけの器や類例の少ない石器に関しては検討の余地が残されているといえよう。

引用・参考文献

- 1) 埼玉県「南（みなみ）I遺跡」『埼玉県史』資料編2、1982
埼玉県遺跡調査会「諏訪山貝塚 諏訪山遺跡櫻山貝塚 南遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査報告第8集、1971
- 2) 小川良祐・金子真士「池守・池上遺跡発掘調査の概要」『資料館報』No10 埼玉県立さきたま資料館、1980
中島宏「熊谷市池上遺跡発掘調査概報」『資料館報』No13 埼玉県立さきたま資料館、1982
- 3) 小野忠熙「島田川」山口大学島田川遺跡学術調査団、1953
森浩一他「鏡音寺山遺跡調査概報」鏡音寺山遺跡調査団、1963
- 4) 銀山猛「環溝住居址小論(1)～(4)」「史潮」第67・68・71・74・78輯 九州史学会、1956～1959
- 5) 栗本佳彦他「宮原」佐江戸遺跡調査会、1976
- 6) 杉原莊介「南関東を中心とする土師部祝部土器の諸問題」『考古学』第10卷第4号、1939
- 7) 杉原莊介「上総宮ノ台遺跡調査概報 一補道一」『古代文化』第13巻第7号、1942
- 8) 杉原莊介「下総須和田出土の弥生式土器に就いて」『考古学集刊』第3巻第3号、1967
- 9) 杉原莊介・大塚初重「千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群」明治大学文学部研究報告 考古学第四冊、1974
- 10) 杉原莊介「栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群」明治大学文学部研究報告 考古学第八冊、1981
- 11) 杉原莊介「須和田式土器の細分について」『わかしお』No1 若潮会、1977
- 12) 杉原莊介「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」『考古学集刊』第三巻第四号、1967
- 13) 蛭間真一他「上敷免遺跡」深谷市教育委員会、1978。
- 14) 増田逸朗「飯塚遺跡」『埼玉県土器集成』4 埼玉考古学会、1976
- 15) 高山清司他「三ヵ尻上古遺跡」『埼玉県土器集成』4 埼玉考古学会、1976
- 16) 前掲1) 上
- 17) 前掲1) 下
- 18) 利根川章彦他「美里村後遺跡の調査」『第16回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会、1983
- 19) 合田芳正「関東地方の青銅製品について一大庭遺跡発見の銅鐵をめぐってー」『考古学雑誌』第65巻第4号、1980
- 20) 大庭康夫「関東地方弥生時代住居址出土の銅鐵について」『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書』No6 遺跡一II No9 遺跡一I、1982
- 21) 井上義安他「鶴釜」大洗地区遺跡発掘調査会、1980
- 22) 蛭間孝次「霞ヶ関遺跡」『日本考古学年報』25、1974
- 23) 栗原文藏他「水深」埼玉県遺跡調査会報告書第13集、1972
- 24) 小出輝雄「富士見市南通遺跡の第3地点調査」『第16回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会、1983。

写 真 図 版



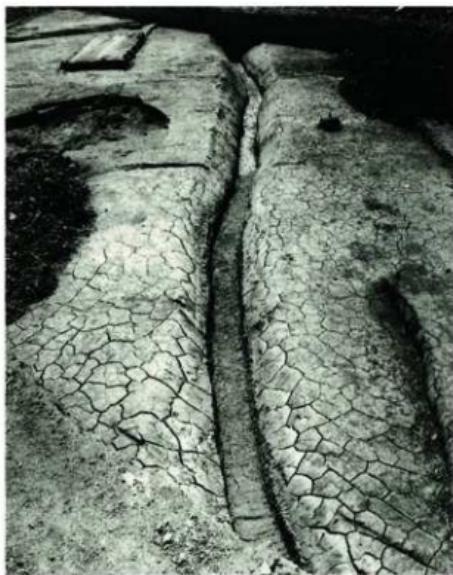
(1)住居跡全景（南東方向から）



(2)銅鑑出土状態



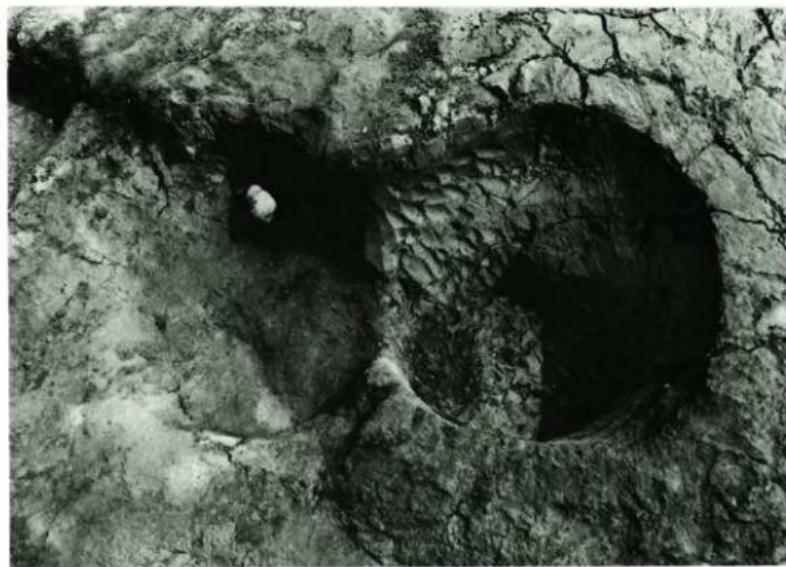
(1) 1号溝全景（北東方向から）



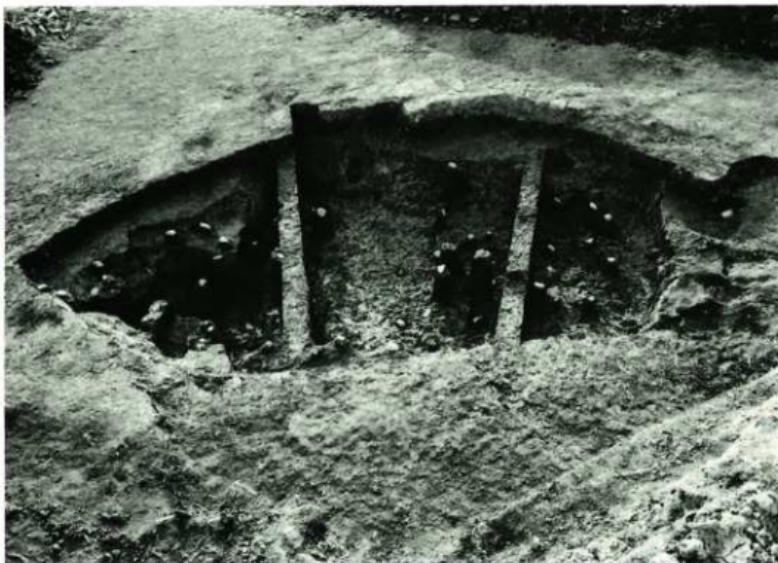
(2) 2号溝全景（北方向から）



(1) 1号土坑全景（北東方向から）



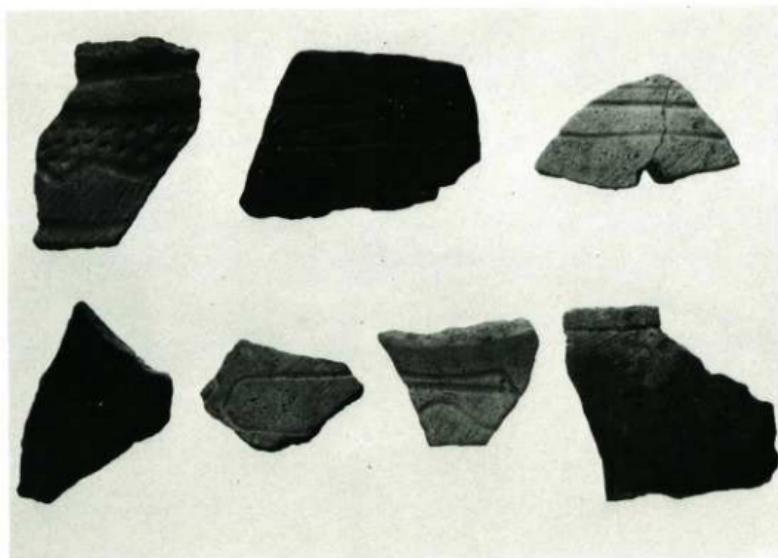
(2) 2・3号土坑全景（南東方向から）



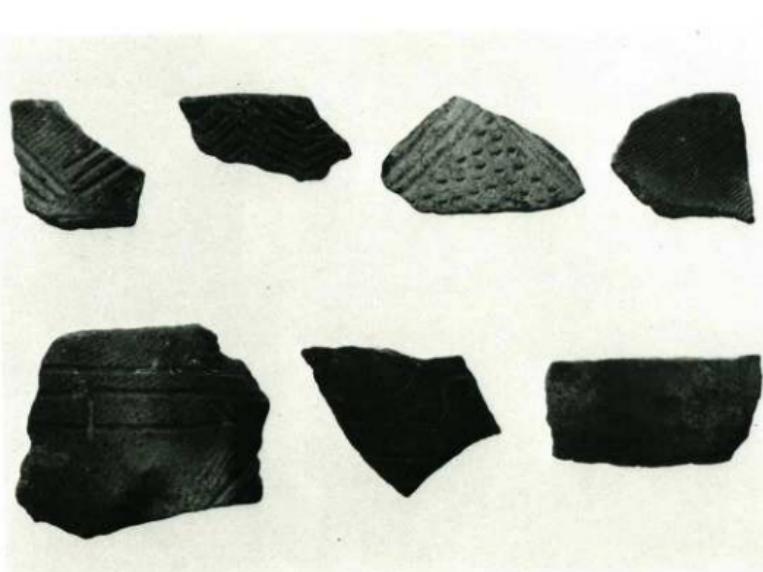
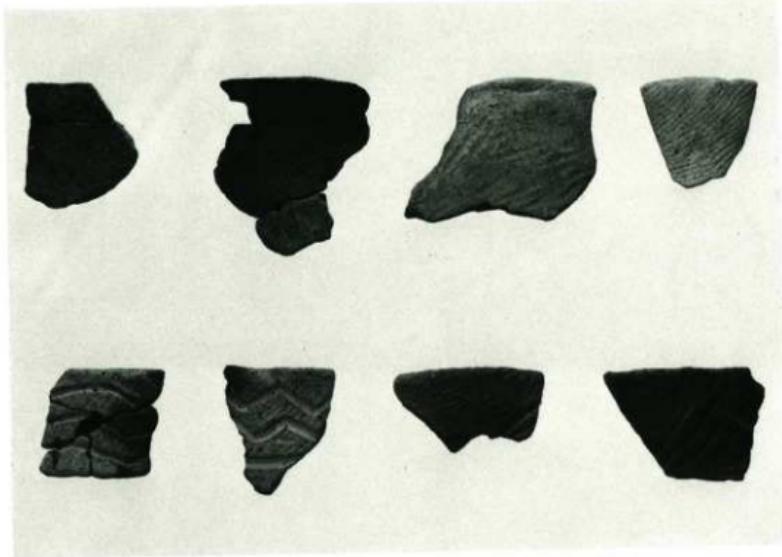
(1) 5号土坑遺物出土状態



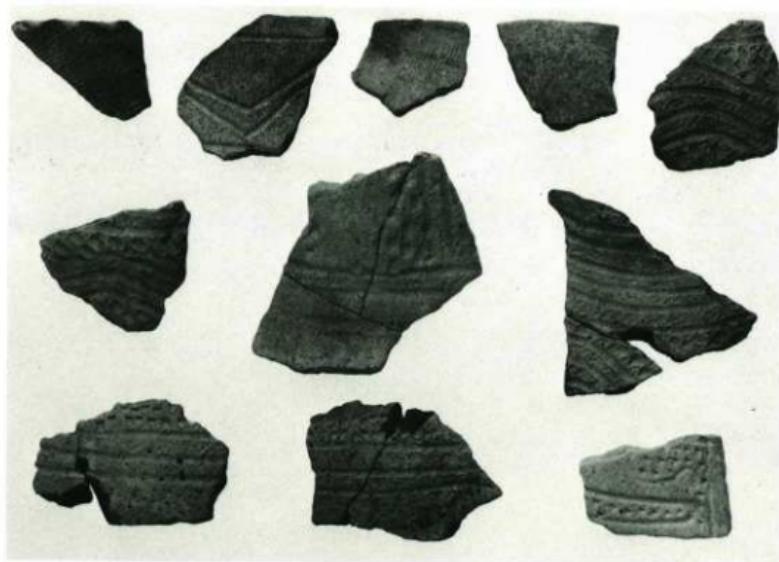
(2) 5号土坑全景（北東方向から）



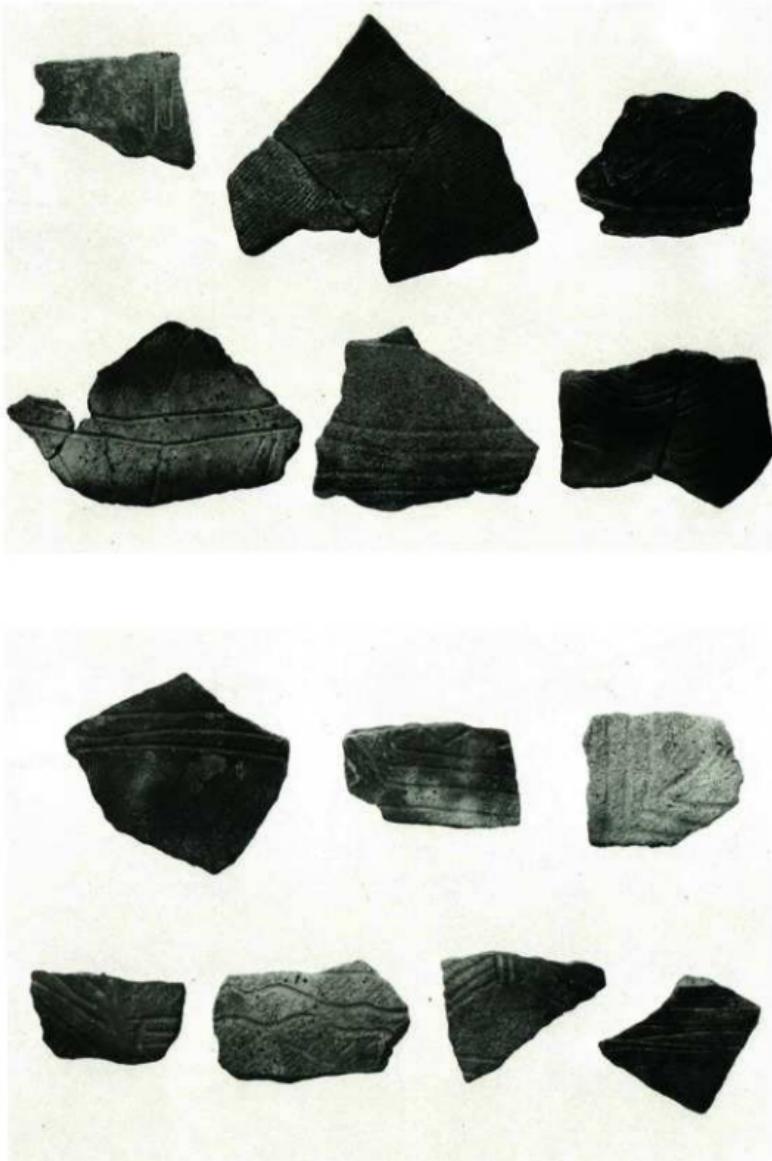
住居跡出土土器



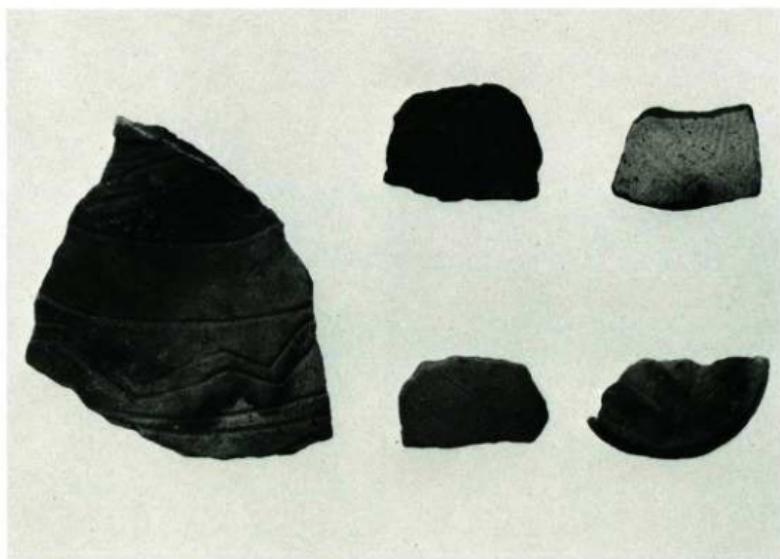
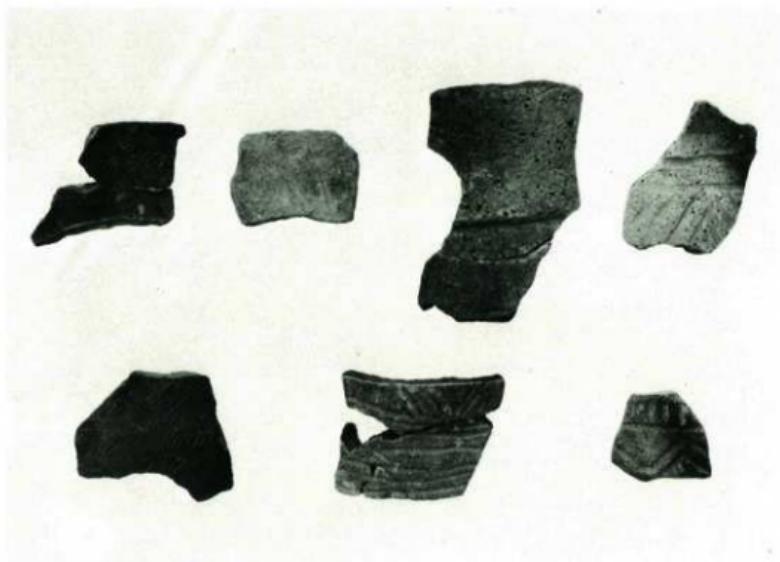
1号溝出土土器



2号沟出土土器(1)



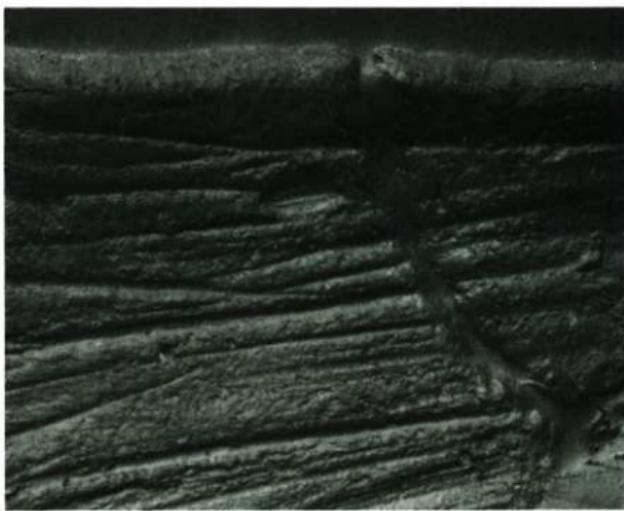
2号沟出土土器(2)



1号土坑出土土器

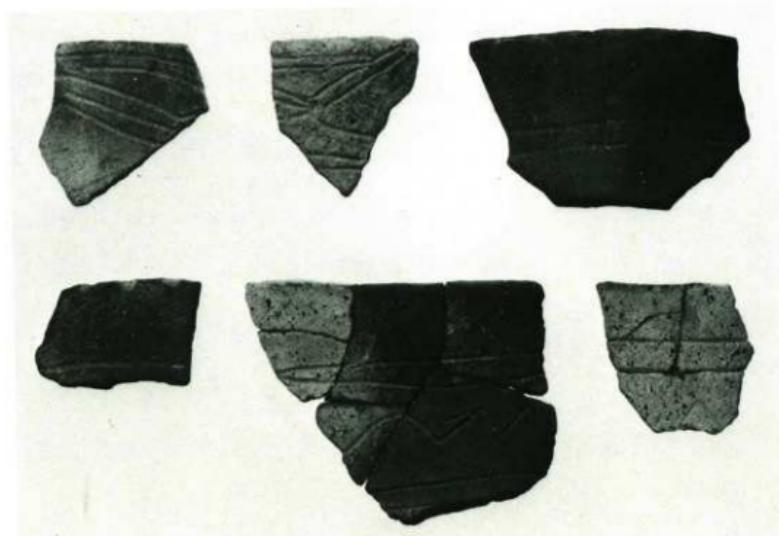
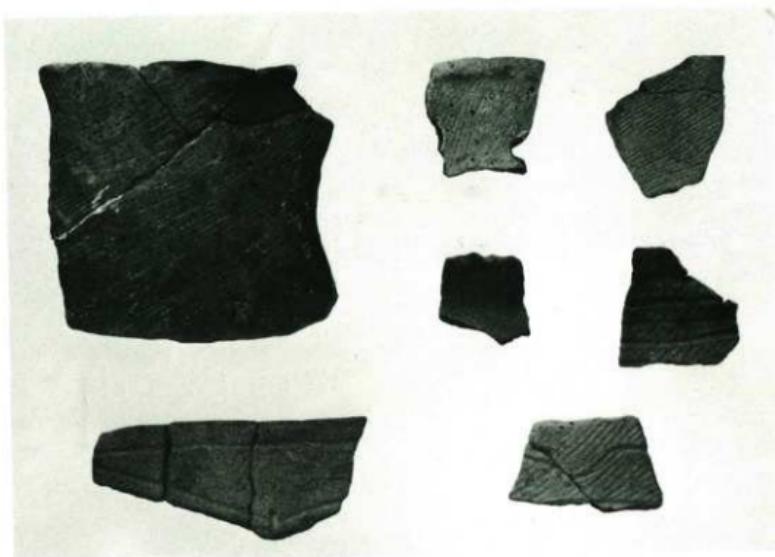


グリッド出土土器(1)

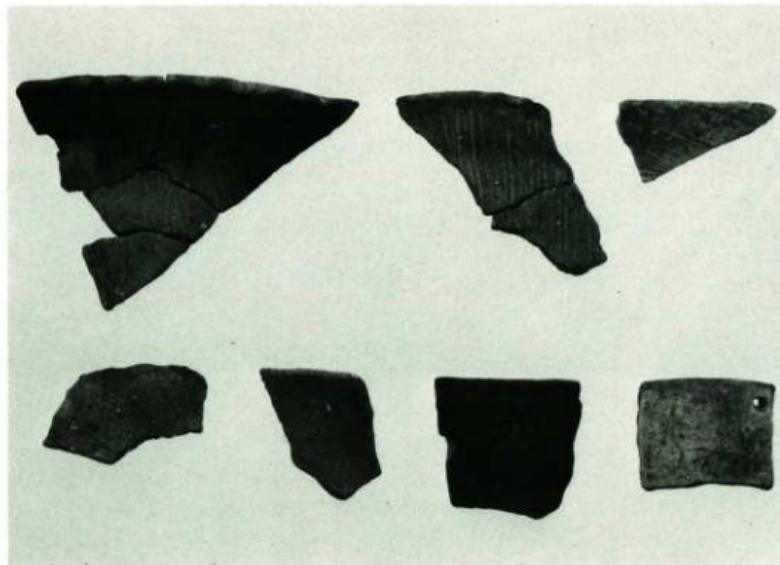
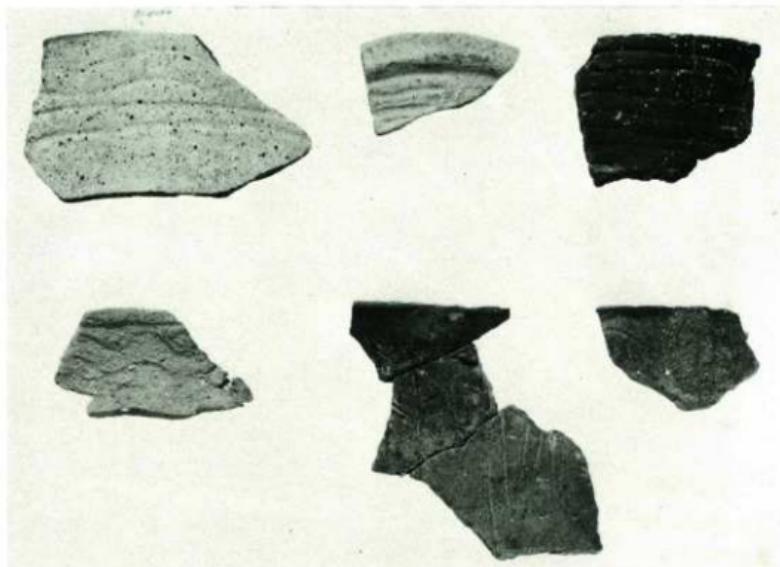


輪痕拡大

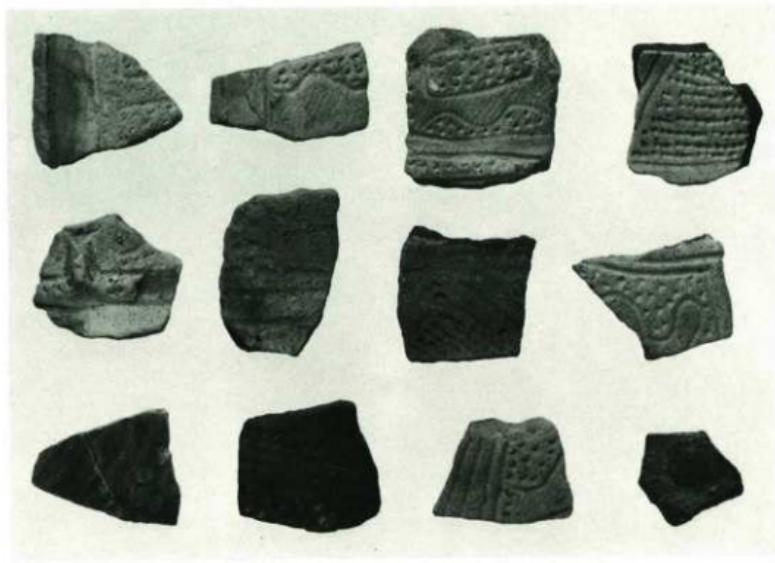
グリッド出土土器(2)



グリッド出土土器(3)



グリッド出土土器(4)



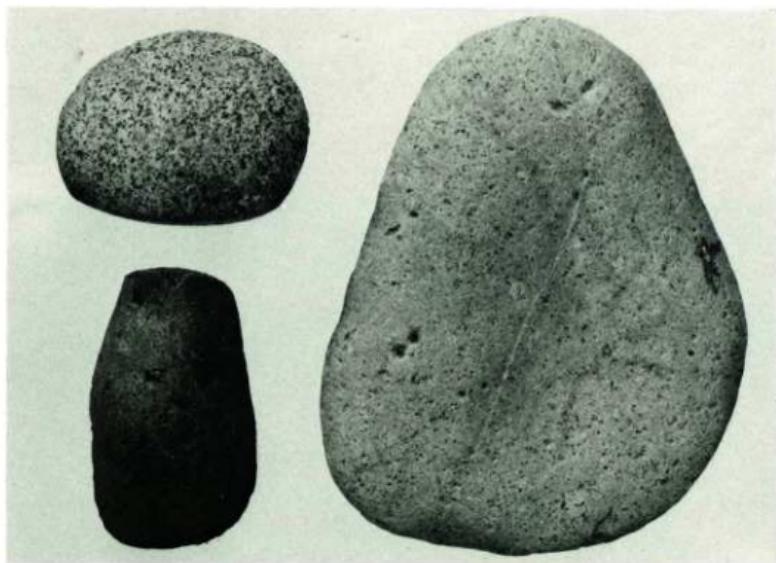
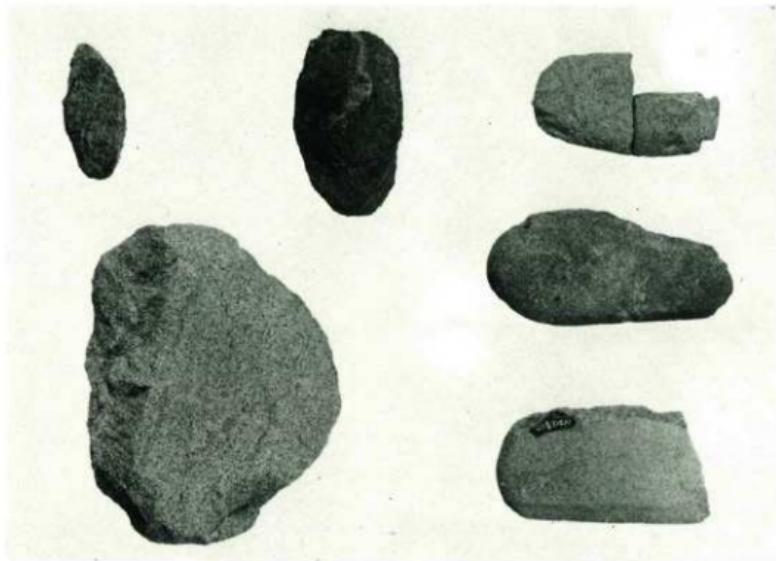
グリッド出土土器(5)



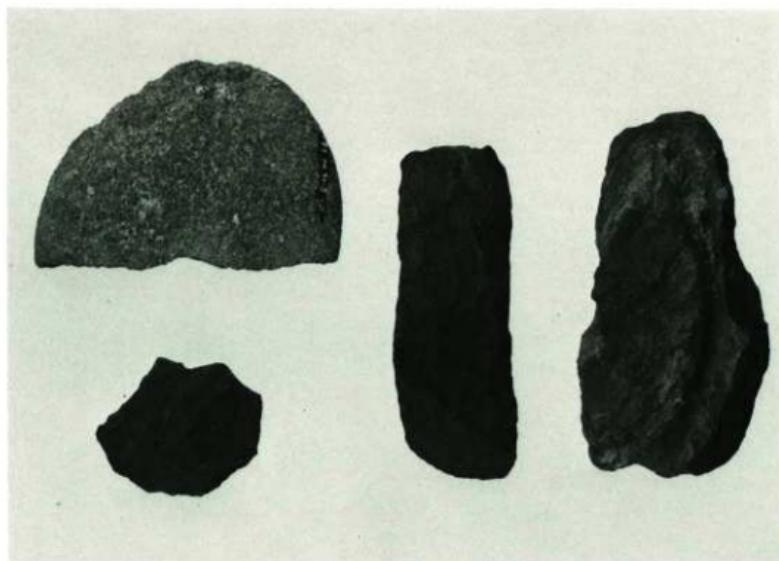
グリッド出土土器(6)



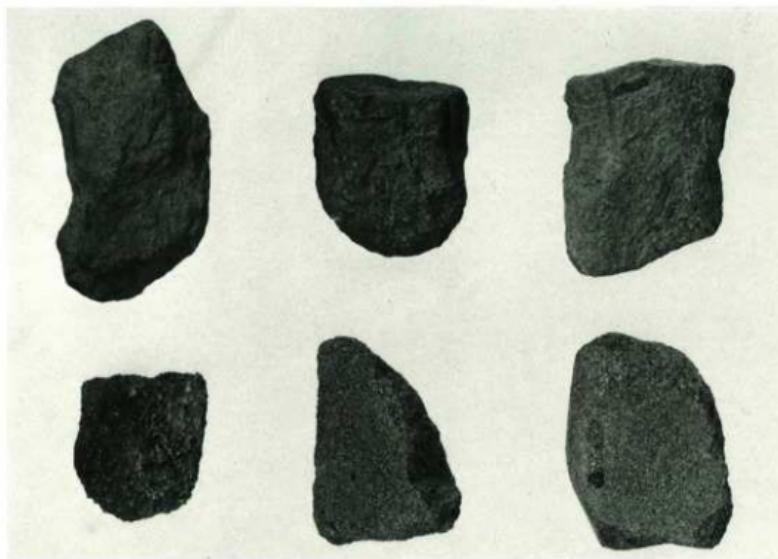
グリッド出土土器(7)



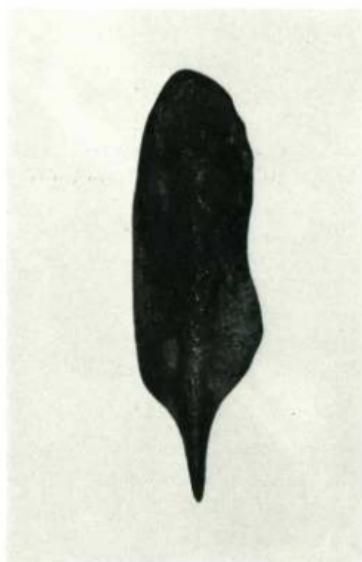
住居跡・グリッド出土石器(1)



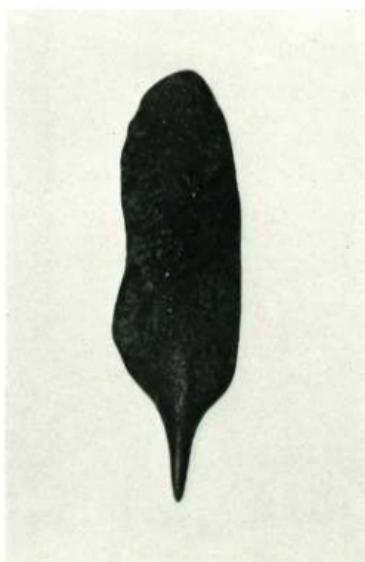
住居跡・グリッド出土石器(2)



グリッド出土石器



グリッド出土銅鐵



埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第21集

一般国道17号線熊谷バイパス道路関係

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

池上西

昭和58年2月19日 印刷

昭和58年2月28日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

印刷 新日本印刷株式会社